
上条with絹旗

たけんちゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

上条with絹旗

【Nコード】

N2742X

【作者名】

たけんちゅ

【あらすじ】

絹旗最愛がある事件で上条と知り合い、<置き去り>で身寄りのない絹旗を上条が引き取りあの寮で一緒に生活したら…。
楽しい生活？幸せな生活？いいえ、上条特有の不幸体質で次から次へと災難が。

とある魔術の禁書目録の再構成二次小説です。

上条当麻×絹旗最愛の義妹同居SSです。

某インなんとかさんとは出会わなかった別のとあるstory。

作者が絹旗大好きな為に描いた、自己満足SSです。

アニメのみ見ているという方は絹旗を知らないと思います。

そんな人はこの作品で知ってください。（過大な著者の好みが入っていますw）

そして絹旗を好きになってあげてください。

そんな内容に出来るように努力します。

原作の絹旗が好き！という人も、一応見てくださいw

イチャイチャは思う存分ふんだんに盛り込みます。

戦闘シーンは極力回避します。細かい描写が無理なので。

女の子の心境は必死に書かせて頂きますが、日々勉強です（笑）

続々と女性キャラが出ます（科学側のみ）。

でもちゃんと上条×絹旗です。

このSSの内容としては台本より地の文多め、小説やラノベより地の文少なめ。

そして難しい単語や設定はありません。

A c t ・ 0 (前書き)

アクセス10万を記念してA c t ・ 0の更新です。
読書さまのお陰です。ありがとうございます。

初めてこの作品を読まれる方も、最新話まで読んでくれる方も、
どちらも楽しめるようにしました。

A c t ・ 1から見ると色々とごたごたしてるので、
この話ありきで見ただけだと嬉しいです。

d i s p u t e > 喧嘩の始まりは分からない <
O n i g n o r e c e q u i a p r o v o q u e ? l a

A c t . 0

A c t . 0

土曜日の朝。

とある男子学生寮の一室。

冷蔵庫の扉を開けて大きく口を開く少女、名を絹旗最愛という。

「お兄ちゃん、もう冷蔵庫の中空っぽですよ。何にもありません」

なん…だと…！？と言つぐらゐに目を大きく見開く少年、名を上条当麻という。

「えっ！これから土日のメシ無い…」

この二人、世間一般で言われる彼氏彼女という関係ではない。
血の繋がっていない兄と妹の関係。

だからといって男子学生寮と一緒に住む理由にはならないのだが、生憎この部屋の一室隣、土御門の部屋にも実は土御門の義妹が住んでいる。

これは寮側が容認したのでは無く上の処置らしいのだが、もっぱら巷（学生間）では”あの寮に住むと義妹と暮らせる伝説”を生み、

入居希望者が後を絶たない為に寮の運営側は文句を言えないでいる。

ましてやその義妹が常盤台中学校と繚乱家政女学校の生徒なので、付いてくるネームバリューは辺鄙な高校の寮では一生手に入らない。

だからと言ってルームサービスが付くわけでもなく、食事の宅配が行われる訳でもないので、

こういった、いわゆる命の危機という状況に難無く陥る。

しかしそこはレベル4の最愛。奨学金が半端無い。

それはレベル0の当麻のソレとは比べ物にならず、

今、当麻はそれを本当にピンチになった時だけ借りる。

絶対に返す事は当麻に根付く人間性なのだ。

と格好よくまとめはいるが、今こそそのピンチの状況。

「財布の中身には3000円…。絶対お返し致しますのでどうかお貸してください」

それを聞いた最愛は驚く。

あの兄、当麻がそれほどのお金をまだ財布に持っていたとは驚きだ。

「それは大変です、じゃあ今すぐ超特急で食べに行きましょう」

この言葉の裏に、デートが含まれているという事を当麻は知らない。そしてその30000円を最愛は服を買って貰う用に狙っている事も。

「よし、行くか」

ファミレス

7

「一応聞くけど何食べたい？」

「お兄ちゃんが選んだ物ならなんでも食べます」

「それって結構プレッシャーだからな」

いつも、最愛は食事を当麻に作ってもらう。

美味しいからであり、食事の好き嫌いも同じだからである。

ここで暮らし始めた頃からずっとそう。

それが、最愛なりの”最大級の信頼”である。

もっとも、幼くして家族との生活が断たれた最愛にとってそれしか知らない。

.....

…
…

「ん〜やっぱり、お兄ちゃんの料理の方が美味しいですね」

一口サイズに切られたハンバーグを一つフォークに刺しながら言う。

「それは嬉しいんだけど、お店でそれを言うのはちょっと…」

「どうせ冷凍です、やはりお兄ちゃんの作りたてには敵いません」

「とか言つて、残すのは感心しないぞ」

「今はただの著休めですよ、ちゃんと食べます」

ゆっくりと一つ一つを消化していく最愛。

それを水を飲みながら眺めている当麻。

「見られてると食べづらいなんですけど…」

「ああ、ごめん。最愛に見とれてた」

「見っ…／／／」

「どんな料理も美味しそうに食べるな〜と」

そっちかよ！と突っ込みを心の中で入れる最愛。

「まあ、不味いという訳でも無いですし…」

「作る側も、作った甲斐があつたなつて思えるんだよな」

今の食事で見せている表情、当麻はそれをいい表情だと言ったが、
当麻の料理で且つその場に当麻がいればそれ以上になる。

それは平日の当麻との夕飯、休日の朝昼晩。そして、

学校、”常盤台中学での昼食”である。

そもそもこの学校は昼食は学食なのだが、最愛だけ兄特製の愛情弁当である。

見せつける…否、自慢しているのだ。

私だけが”学園都市で有名なあの上条当麻の義妹であり一緒に生活している”と。

常盤台でももちろん、不良の毒牙から当麻に救われた、もしくは一目惚れしたという生徒は大勢いる。

おっと訂正、生徒だけでは無かった。

だからなのだろうか、

『私に寄せせ』『幾らで買えるのか?』『なんであの女なんだ』の視線が痛い。

むしろ絹旗にとってはその視線がうれしい。

兄は私だけのもの。そこで私が一人勝ちするのを黙って見ていると。

絹旗の周りには、御坂派でも食蜂派でもない上条派がある。注意してもらいたいのだが、最愛は今上条当麻の義妹だ。

そう、最愛に近づけば自然に当麻と関わるのではないかと踏んだ輩が作った派閥。

だから学校が始まってから終わるまで（休日もだが）遊びのメールが絶えない。

一日に100通以上。

『今日一緒に遊びませんか？』

『去年のノートあげるから』

『一生貴女の奴隷でいいから』

どこぞのスパムメールだ、と目を覆いたくなる。

ちなみに最愛は一年だというのに、その下には生徒・先輩・OB・先生など存在する。

綿密に言えば御坂も食蜂も上条派（当麻の毒牙にかかった）なので、実質常盤台を握っているのは最愛となる。

そんな数百通のスパムメールを含め、友達とのメール（もっぱら当麻の自慢）などを含めた乙女の携帯料金は最愛自身の奨学金から払っている。

と、最愛は思っているのだが、実はそれも当麻が自分の娯楽に使う奨学金で出している。

こういう配慮…当麻にとってはごく普通な事こそが、モテる所以なのだろう。

それだけで済まないのが上条当麻。

寮での光熱費や水道ガス代、自分を含めた食費や洋服代、果てに最

愛へのお小遣いまで、
それら全てを当麻は自分の奨学金から出している。

何故か。

最愛がいつか好きな人が出来て結婚した時、
自身の奨学金があれば苦労しないだろうと考えているからだ。
しかし当麻の想いの裏で、最愛のベクトルは完全に当麻に向いて
いるのだが。

これこそ、”兄の心、妹知らず”なのだろう。

「食べる側だって誰にでもこんな表情する訳じゃありません。食事は皆で食べるから美味しいんです」

それは、最愛が嫌う独りの記憶。

「複数でなくても良いんです。それが例えば…すっ…好きな人だったり」

好きな人と食事を囲う。それが出来なかった最愛にとって、

「その後で料理の美味しさ云々なんですよ、お兄ちゃん」

こういう平和な時が過ぎせる事が堪らなく嬉しい。
だからこそ、好きな兄と食事を取れるからこそ、
今無意識に出した最愛の笑顔に当麻はどきりとしてしまうのだが。

「さて、すっかりお腹もいっぱいになりましたし、次はお買い物ですね」

そう言う最愛に右腕を引つ張られる形で店を後にする当麻。

「ちよちよちよ…まさか服とか買いに行こうとかしてないか？」

「はい、そうですが？」

「その『なんか間違った事言いましたか？』みたいな表情は何だ」

「だって…冷蔵庫の中身は無いと」

「おう」

「だったら買わなきゃいけないじゃないですか、服を」

「話になんの脈略が無い…ていうかじゃあ最愛は冷蔵庫に服を入
れんの？」

「いや…入れる訳無いじゃないですか。というかつべこべ言わず
に超行きますよ」

「ああ待って、上条さんお気に入りのＴシャツが伸びてる!」

こうして二人の休日が始まる。

結局服は買わなかったが、
その帰りに寄ったスーパーの帰り道、
そこであつた些細な喧嘩が、この物語が始まり。

A c t . 0 (後書き)

A c t . 1 に繋がる内容を補完させていただきました。

以上が10万アクセス記念A c t でした。

A c t . i (前書き)

初投稿です。最初から重い出だしですが、少しずつ明るくなっていきます。

そして兄べったりな最愛に注目しながら読んでみてください。

A c t . 1

・土曜の昼

機械が街の大半を埋める学園都市。そこに無数にある路地裏の一つ。昼間の太陽光が僅かに射す、暗い路地裏。

スーパ―からの帰りに、抜け道を使った一人の少女。そもそも路地裏にいい思い出は無い。

しかし大通りを使うと家まで遠いので仕方ない。

仕方なくそんな道を使った今日に限ってそこには3人の不良と呼ばれる男達がいた。

能力開発が行われている学園都市でのみ存在する、《スキルアウト》。

能力が発現できない者は、能力を必要としている学園都市では必要ない。

そして能力者に恨みを持ち、無能力者が集って復讐しようとする組織、それがスキルアウト。

そんな不良を前に、絹旗最愛は立ち尽くしている。

「こんなところに一人で危ないよ、最近路地裏で殺人事件あるの知らない？」

「ああ、なんか最近ニュースや新聞で超流れますね」

「物騒な世の中な訳だが…」

不良達が所持している武器を出し威嚇してくる。

「（はあ…まったく…。これだからお兄ちゃん以外の男は超好きになれないんですよ…）」

「なるほど…あなた達が超犯人って訳ですか」

その光景を見ても、動揺するどころか溜息をつく少女。

「あ、そうそう、超言っておきたいことがあります」

「「あ？」」

「私はレベル4です。私に触れると超怪我しますよ」

事あるごとに邪な思いを持って接してくる不良共に、毎度の台詞を吐く。

「こえー、マジかよー」

「超信じていないようですね」

こういう馬鹿の大体は、複数で立ち向かえば能力者に勝てると思っ込んでいる。

だからそんな台詞では引いてはくれない。

と、そこで一人の不良が不適な笑みをこぼしながら言う。

「いや、だとしたら好都合だわ」

キーーーーン

「っ!!！」

脳を圧縮するような痛みにも、最愛は壁に背をつけて崩れる。
能力者の脳を外部から刺激し、演算出来ないようにさせるA I M ジ
ヤマー。

それはもちろん、最愛も例外にはならない。

「おーおー、効き目バツチリだな」

「っ!?! (頭が割れるように痛いっ!!!)」

「さすが木原の産物。能力者をハムスターとしか見ないからこそ
作れた物だわな」

「ああ、これで抵抗は出来ない訳だ」

不良達は低俗な談笑をしている。

最愛は演算がうまく出来ず、何度も何度も再演算を試みる。

「(くっ、これは…超ピンチです…)」

「やてと…」

低俗な談笑を終えて歩み寄ってくる不良達。

その姿が見えていても、脳の痛みから身体をうまく動かせない。

最愛は中学一年生。精神的にまだ子供、この状況が堪らなく怖かつ

た。

「グスッ……ヒグッ……」

気づけば最愛は涙を流している。

「あーあ、泣いちゃってるよー」

最愛は頭が痛いのも忘れ、目を瞑って兄の後ろ姿を思い出す。

（ お兄ちゃん ）

不良達は一步一步確実に近づいてくる。

下手したらここで最愛は陽の目を見る事無く殺されるかもしれない。けどそれより恐れる事はもう二度と兄と会えなくなる、それが一番怖かった。

いつも私に向けてくれる優しい笑顔や気遣う言葉。

それがなくなる、そう思うと絶望した。

もう言葉なんか出ないし涙も枯れてきた。

最愛は、兄無しでは生きられなくなってるぐらいに依存している。そしてそれは兄妹の仲なんて小さな絆には収まらない程に。

こんな事になるんだったらもっと素直に接していればよかったと、こんな事になるんだったらもっと抱きついておくべきだったとそう

思う。

こんな事になるんだったらもっと「大好き」って言ってあげれば良かった。

コツコツと不良達の足音が近づく。もうお別れの時間らしい。

（お兄ちゃん…こんな妹でごめんね…。最後まで超迷惑かけちゃった…）

A c t . 1 (後書き)

どれだけ最愛の生活の中に”上条当麻”が根付いているのか、上手く書けてるでしょうか？

Act・2

兄とはついさっきまで一緒にスーパーに買い出しに行っていた。ほんの些細な出来事で最愛は怒り、一人でこの路地まで走ってきた。

（あのお兄ちゃんの事だから負い目を感じているでしょう…）

最愛はどんな状況に置かれても、自身よりも兄の事を想う。それほどに心の大部分を占めている。

（ごめんなさい、お兄ちゃん…）

しかしそんな事を知らない不良の一人が刃物を振りあげる。

（お兄ちゃん）

路地裏に僅かに射す光によって僅かに照らされる瞼の裏。

瞼の裏にある自分だけの世界には鮮明に兄の姿がある。

人は”死”を覚悟すると今までの記憶が走馬灯のように蘇るとい
うがそれは違う。

たった一場面。一番心に残った場面のみを強く思い出す。

それが自分の生きがいとでも象徴だとしても言える時間、風景、人。

そこまで愛おしい程に眩しい兄の姿が…光を遮られて、黒になって消える。

…じつ

Act・3

「あ…れ…？」

自分の体に痛みはない。

いつまで経っても痛みがないことを不思議に思った最愛は目を開ける。

「大丈夫か、最愛」

その姿は過去にも見たとても大切な記憶。

いつも優しく私の名を呼んで笑う、超やさしいヒーロー。
いつもギリギリの所で来てくれる、超格好いいヒーロー。
いつも補修ばっかで頭が良くない、超お馬鹿なヒーロー。
いつも朝早くご飯を作ってくれる、超家庭的なヒーロー。
いつもそこら中でフラグを建てる、超旗建築士ヒーロー。
いつも女の子の好意に気づかない、超鈍すぎるヒーロー。
いつも自分よりも妹の事を考える、超シスコンヒーロー。

今自分の前で両手を広げて私を庇うように立つ人こそ、その兄。

名を上条当麻という、一人の少年だった。

当麻は肩越しに最愛を見て言う。

「大丈夫か、最愛」

「お…兄…ちゃん」

「怪我は無い…けどまだ苦しいんだな。ちょっと待ってる」

いつも最愛に見せる優しい笑顔で心配してくれる兄。

「さてと、どんな仕組みかは知らねえけど、さっさと普通に返してくれないか？」

そついう当麻は不良らに視線を向ける。

「なるほど、お前レベル0か。どうりで聞かねえ訳だ」

それでもまだ息まく不良に、

「もう一回言う。さっさと戻せ！」

「おいおい、立場が分かってねえようだな。丸腰の野郎と女なんざすぐに殺せるんだよ！！」

当麻はその言葉をスイッチに、

刃物を振っていた不良の顔面に拳を放ちつつ言う。

「言っちゃいけない事を言った。お前ら、許さねえ!!」

表情は後ろから見えないが、声色は明らかかな怒り。

と、そこに《警備員》が駆け付ける。

「おい、何してる!!」

「ちっ、おいズラかれ！」

路地の奥へと逃げていく不良。

「追跡班と探索班は引き続き作戦を続けてくれ」

『了解しました』

《警備員》は慣れた手つきで最愛の頭痛の元である機械を停止させる。

「おい、君は大丈夫か？」

「大丈夫なんで早くアイツら追ってください」

「ああ、わかった。救急車は呼んでおくからここで待ってるんだよ。」

「はい」

そついうと《警備員》は通信しながら路地の奥へと消えていった。

Act・3 (後書き)

着実に戦闘シーンを回避しておりますW

Act・4

「怖かったろ？」

手を最愛の頭の上に置き声をかける。

最愛はそれだけで頭痛が少し楽になった。

それが当麻の能力なのか、安心感からなのか、それとも両方、別のものなのか。

「少し、良くなりました」

と、そこで、ずっと兄の呼吸が不規則になっている事を最愛が気づく。

ふと兄の足元を見ると、赤い液体が大量に地面に滴り落ちている。

「ちょ…お兄ちゃん！ 超怪我してる！」

段々と白いワイシャツが赤く染まっていく。

当麻は胸から腹に伸びる長い切り傷を見る。顔を痛みに耐える苦しい表情になる。

「ああ、こんなん平気だ。それよりも最愛に怪我は無かったか？」
「無いよ、無いけどー!!」

自分の事なんかより人を気遣う。それが当麻。

「そうか、よかった。最愛に怪我があったらお嫁に行けないからな…」

こんな時にでも、兄は妹の将来を気にかける。

「私よりもっ…自分を超心配してください！」
「いいんだよ、こんなもん…は…」

ドサッ

「えっ、お兄ちゃん、ちょっと!？」

こんな緊急事態に最愛は動揺する。慌てて医者が車からやってくる。胸の前にある無線機で交信しているのだが、慌て方が尋常じゃない。

「どっし…お兄ちゃんが！ どっしよっし…」

状況の整理なんてできない。

「刃物で切られて…」

体の前面には血があふれ続ける傷。

「落ち着いて…、落ち着いて…」

冷静を装うが、そんな仮面はすぐに腐り落ちる。

「わ…私の能力で…止血…を…」

幾ら能力を発現させようとしても、こんな不安定な心理状態。まして兄と慕う上条当麻に異能は一切効かない。

「何時もなら出来るのに…」

皮膚から窒素の膜を覆うことなんて出来ない。

それは兄の能力のせいなのか、妹の焦りからなのか。

自分の頭に置かれた左手は力を失い、落ちそうになる。それを最愛は必死に掴む。今出来る事はそれのみ。

兄の手が離れてからまた頭痛が酷い。手を掴むのが精一杯な程に。

大能力者の絹旗最愛、《室素装甲》を発現する常盤台中学一年生。能力が使えれば車を楽々投げ飛ばせるその両手。

しかし今その両手は当麻を支えるには心許無い、一人の幼い女の子の手。

その両手で当麻の手を掴み、必死に兄を呼ぶ最愛。

「お兄ちゃん…！」

お気に入りのセーターが血で汚れていても、そんなことはどうでもいい。

そんな物なんかよりもっと大事な人を、助けなきゃいけない使命感の方が重要だった。

決して近くは無い病院に向かって、決して速くない速度で救急車は進む。

気づけば空は曇り、雨が降ってきた。二人に付いた血を洗い流すように。

Act・5

青白く発光する兄のレントゲン。それを見つめる妹と医者。
まだ医務室の窓には雨が打ち続けている。

「こんな昼間に切り傷を負うって、何をどうしたらこんな事になるんだね？」

医者は飽きた様子で言う。

「お兄ちゃんは大丈夫なんですか!？」

「止血のお陰だね。とはいえ傷は深いから痕が残るかもしれない」
が、当麻が担がれて運ばれてきた時は流石に驚いた。なんせ血だらけなのだから。

「私のせいで…、私が変な事でヘソを曲げなければ…こんな事にはならなかったのに…」

最愛は自分を責めた。自分が兄を刺したようなものと。と。
それを考え始めたらどんどん深みに嵌り、無限大に倍加されていく自己嫌悪に陥る。
最愛のパーソナルリアリティーは、兄の不安定な存在と自己嫌悪からボロボロになっていた。

「一応、出来ることはしたから、あとはそっとしておくことだね？」

「はい…」

「…」

「…」

最愛の心情は、知らない人間からでも容易に分かるぐらい疲労している。

ましてやそれが、月にある程度合う医者なら、さらに細かく分かるだろう。

「……208号室……、いつもの病室に患者さんを運んだから」

「え…？」

「傍にいてあげる。それが一番患者さんにも君にも良いと思うんだがね？」

医者だって一人の人間だ。

一人の少女が死にそうなオーラを漏らしているのはいい気分ではない。

「あ…ありがとうございます」

最愛は、お礼を済ませると覚束ない足取りで兄のいる病室へと向かった。

A c t . 5 (後書き)

病室の号数は適当です。分かり次第修正します。

A c t ・ 6 (前書き)

最愛が駆け出していった後の診察室です

医師はカルテに書いてある文字を流し見していく。

「火傷、骨折、捻挫、脱臼、打撲、風邪、流行り病…、それ以外にも…」

「何をどうしたらそこまで怪我やら病に罹れるんでしょうね」

部屋の奥から銀のプレートを持った看護師が出てくる。

「ああ、用意ありがとうございます」

「しかし…ここまでくると病院が好きなんじゃないかって疑ってしまいます」

「いや、もしかしたら君（看護婦）目当てかもしれないね」

医師は冗談で言ったつもりなのだが、何故だか看護婦は嬉しそうな表情。少し気分が下がる。

「あ、そうそう、次の患者さんなんです…」

「どうかしたのかね？」

「受付で『コイツが何故だか朝から調子が悪イみたいなんだよオ』と」

「あー、またあの子かね？ どうせ毛布を掛けずに寝て風邪でもひいたんだろ？」

脳裏にその様子と、内心慌てふためく彼を想像してニヤリと笑ってしまつ。

「医者としてその発言はどうかと…」

「どうしてこう…私が見た患者さんっていうのは何度も何度もここに来るのかね？」

「…彼が持つと言われる『不幸』ってのが少なからず蔓延してるんじゃないですか？」

「私に休憩時間が無いってのも彼の不幸が移ったのかね？」

「それを言ったら私もですよ」ハハハ…

それでも、それが収入に繋がるからというわけではなく、当麻達の成長を見守る親のような、そんな気分を味わせてくれる。それだけで十分、不幸では無いのかもしれない。

「まったく…何度妹さんを泣かせたら気が済むんだね…上条当麻

…」

A c t . 6 (後書き)

ちよつとオマケでした

Act・7

208号室のドアを横にスライドさせる。

そこには一定の間隔で鳴る機械と、呼吸をする音が響いていた。複数の点滴が血を補うように繋がれている痛々しい兄の姿。

すぐさま駆け寄り、兄の手を握る。

すると当麻が、最愛の手の温もりを感じて瞼を開ける。

「また病院に世話になっちまったな。今月厳しいってのに・・・」

そういつて窓の外を見る。兄は自分にかかっていた薄いタオルを一枚、最愛の肩に優しくかける。

「こんな雨だ、気温下がって風邪引くかもしれないねえ…。一大事だ」

病室から降る雨を見る。雨脚は強い。

「あー…あとのままじゃ飯作ってやれないな……ホントごめん
な……」

兄はこうやって自分が悪くなくても、何でも代わりに背負う癖がある。

いつもだったらそれが堪らなく魅力的に感じるはずなのに、今回は全く感じられない。

「とは言っても、上条さんってば頑丈だからすぐ退院できるだろ

うん」

「うん

「ん、今までの経験上、明日か明後日ぐらいには……」

「……」

「だから……さ、出来れば泣いて欲しくないんだ。最愛には笑ってほしいんだけど……」

「……に……い……」

「ん？」

「お兄ちゃんが無事じゃなきゃ笑えない！！ 私にとってはたった一人のお兄ちゃんなんです！！」

「そっか……ごめん」

「だから……、自分は超犠牲になっていいとか思わないでください
！」

「ごめん」

「お兄ちゃんはいつもそうやって超謝ってばかり……ずるいです……。
私が謝る筈だったのに……」

「ごめん……」

「謝らないで……超バカ兄い……。そんなに謝られたらバカ兄いを責められないよ……」

最愛は頭にかかるタオルで涙を拭く。

「だからさ、泣くなつて。最愛の可愛い顔が台無しだぞ」

当麻は体は寝たまま、最愛の頭の上に乗せてクシャクシャ撫でる。

「ん… えへへ」

「よかった。やっと笑ってくれた」

最愛は当麻に頭を撫でられると機嫌が良くなる。

当麻を「兄い」と呼ぶ時は甘えたいという意味表示なので、当麻も昔（といっても一年前）からするよつに甘えさせる。こつなると当麻は文句一つ言えなくなる。

「（この状態の最愛にはどうにも敵いませんな…）」

と、そこにもう一人の声が。

「…様子を見に来ただけど…いつもみたく無事なんだね？」

呆れた顔で見ってくるのは、《冥土帰し》と称される医者。

前の患者は普通に風邪だったので、さっさと診察を終え、薬を処方してきた。

それよりもこっちを見てる方が面白いと、医者らしからぬ意思で来てたりする。

「どうやらそこまで一大事という訳ではなかったようだね」

「ええ。また数日で退院できるんですよ？」

「んー、ちよつとかかるかもしれないね」

「そうですね。月に何度病院にお世話になるんでしょうね、俺は…」

「ホントだね…。その不幸という生傷（と仕事）を呼ぶ右手、どうにかならないもんかね？」

「とはいえ、その右手があるからこそ、今の俺と最愛がいるんです」

「ああそうだった。全然不幸ではなかったね」

「ええ。あれ、最愛もう寝てる…」

泣き疲れたのか安心しきったのか、最愛から静かな寝息が聞こえる。

「どうやら安心したんだろうさ」

当麻の寝ているベッドに上体を預けて寝ている最愛は満面の笑みで寝ている。

「それで、その子どうするの？」

「このままにするのも悪いし…俺の横に寝させようかと」

「その為にその横長の患者ベッドなんだけどね」

月に10回以上病院を訪れる当麻は、病院では御馴染で、もちろんその度に今までの内容を最愛と繰り返すわけで、毎回毎回疲れて兄のベッドに寄りかかり寝るのも知っていて、そのまま寝させるのも良くないと思った病院側がつい先月、上条当麻専用で数人が横になれる特注のベッドを買っていたりする。だから疲れて寝ている最愛を横に寝させるとというのが普通になっていたりする。

「まあ君は信用できるから深くは言わない事にするよ。傷が治るまで大人しくしてることだね？」

「わかりました。あの、看護婦さん呼んでもらえますか」

「とうとうナースに目覚めた？」

「いやいや、最愛をベッドに寝かせて欲しいんですけど…。流石にこの怪我じゃ無理です…はい」

「やれやれ…、それ以外の怪我だったら力出せるみたいな言い方だね？」

「打撃は慣れてるんですけど…、切られるのはちょっと…」

「普通の男子高校生は言わないよ。わかった、今呼んでくる」

医者が歩いて行くと、当麻は力無く倒れる。

「あー、しんどい。喋りすぎた…」

最愛の髪を優しく撫でながら当麻は眠りについた。

Act・9 (前書き)

これからちよいちよい看護婦が出てきますw

Act・9

・日曜日

朝の病室

「上条さん、朝ですよー。起きてください」

もう顔見知りの看護婦が病室のカーテンを開けて朝の陽差しを部屋に招き入れる。
看護婦よりお付きのパートナー的に彼は思ってくれていると想像する看護婦だったりする。

「ふぁーっ、あ、おはようございます」

「もう知ってると思いますけど、あと少して朝食ですからねー」

看護婦が病室を後にする。

「……」

横を見ると最愛が無言で俺を睨んでる。

「え〜っど…どうした最愛」

「今看護婦さん見て鼻の下超伸ばしてました」

「伸ばしてない…けど…その…ごめんなさい!」

「はいっ／＼／＼ ってあれ？」

「やばい…血い出てきた…、あれ…？ 景色が霞んで…」

「ああ！ 傷だったんですね、アハハ、超勘違い」 テヘペロ

…「ガクッ

「あれ、お兄ちゃん！？ ちょっと…冗談ですよね！？」 イヤア
アア！

上条当麻と書かれたプレートの前で《冥土帰し》と看護婦。

医者は首に聴診器をぶら下げ、看護婦は何層も食事が収められてる
台車を押している。

医師は呆れ顔、看護婦は…

「…これはもう帰ってもらう方がいいのかね？」

「いいなあ」

…「ゴホン」

「あ、すいません」

「なんだかんだで怪我悪化させてるしね？」

「たしかあの妹さんって…」

あの時の、あの記憶。

「そう。しかし、兄の事となると一直線になるっていうか…固執
っていうのかね？」

「あれじゃあ妹さん、どこにも嫁げないんじゃないですか？ 兄
離れ出来ない妹は」

「まあ、本人的には一人にしか嫁ぐ気はなさそうだけど？」

「はあ…」

「ま、今はそれより患者さんを手当てしましょうか？」

「あ、お医者さん！ 超早く！！ お兄ちゃんが！！！！」

「ああ、今見るよ？」

10時過ぎの病室

真っ白な天井。上条当麻としては見飽きたくないその天井。

「は、教室に居るより病院のベッドで寝てる方が多いんじゃないかねえか、下手したら」

今更どうしようもない事実を、溜息混じりに確認する。

「不幸…ねえ」

不幸の象徴である右手の平を顔の前に出す。

座右の銘が『不幸』、ぐらいの勢いで自分の身の回りにのみ降ってくる不幸。

「でもまあ、その『不幸』があつたから『幸せ』があるんだけどな」

横で昼寝をしている最愛の頭を撫でる。

「せめて最愛にはもう不幸な目にあつてもらいたくは無いんだけど」

自分だけ、自分だけ不幸だったらそれに越したことは無い。

「何言っても『お兄ちゃんの傍からは離れません』だもんな」

未だ甘えてくる妹が嫌という訳ではなく、当麻に降りかかるであろう不幸が妹に移らないか、それが心配なのだ。

「しっかし腹減った〜、どうやら寝てるうちに飯下げられたようだ…。不幸だ…」

と、ここで当麻の病室に來客が。

コンコン

「どつぞ〜」

そう促すと、音をなるべくたてずに病室のドアが開く

「失礼しま〜す…」

「おう、御坂」

常盤台中の制服を着た茶髪の女の子、御坂美琴が今回のお客様。手には紙袋が。

「いやー、毎度毎度すまんね。入院する度にお見舞いなんか来てもらっっちゃって」

「いや別にいいんだけどね」

「ちゃんとお返しとかしないと駄目だな…。紳士上条さんが恩を仇で返してはいけないし…」

「なんだ、やっぱり元気そうね」

「あのな、どこを見れば元気そうに見えるんだよ……」

「あのね、どこを見ればそんなにペラペラ喋れる奴が元気じゃないのよ……」

「うっ……」

「まあいいわ、はいコレ」

差し出されるのは紙袋。茶色の紙に銀色の文字の、どうみても5000円は下らないような物のようだ。

「ほら、《妹達事件》の時にあげたクッキーあるじゃない？」

「ああ、手造りじゃなくてシヨンボリしたやつか」

「それはもういいの！ んでね、その店の新作買って来たから感想を聞かせてよ」

「やったー、今上条さん、空腹で空腹で……」

「そういえばあの時のクッキーの感想、まだ聞いてなかったわね」

「ああ、あれね。俺は食ってない。というか奪われた」

「誰に!？」

「……」

傍で寝てる妹をガン見する兄。それにつられてその妹をガン見する御坂。

「なるほど……」

「見られた瞬間飛びつかれてね、あげた」

「飛びつかれて……」

「『あ、それは超高級菓子店の超人気で超予約しないと買えないと言われる、苺わかめ風味のクッキー!!』ってな」

「なるほど……」

「『私がお兄ちゃんをここまで運んでお腹が超空きました。何か

くれないと次は私が倒れちゃいそうです!』と言われてな」
「それで私のあげたクッキーを、くれてやっちゃったと」

その状況がすぐに思い浮かぶ御坂。

「そういう事。ほれ最愛、起きれ。御坂が菓子持ってきてくれたぞ。ほれ!感想言つたれ」

「あ…別に起こさなくても…」

「ふえっ!? お菓子!? ってまた御坂ですか…」

「もう今更だけど、先輩に対して苗字呼び捨てってどうよ…」

「あ、それは超高級菓子店の超人気で一日一個限定の、ロールキヤベツ風味のロールケーキ!」

「な? さっき言つたろ?」

「なるほどね」

当麻の手から、半ば強引にロールケーキの入った箱ごと奪い去る。

「遠慮なくいただきます!」バツ

「ホント食い意地張ってるわね、アンタは」

「おお、流石超高級。ロールキヤベツを食べているような…そんな味です」ホムホム

「それ別にロールケーキにする必要ないじゃん!」

「店主のチャレンジ精神を超評価します!」

「…学校でもこうなのか?」

「ええ。扱いづらい後輩の一人ではあるわね…」

「なんだろうか、すまないな」

「いや、別にアンタが謝らなくても…」

「妹なもんでな、兄として謝らねばな」

「…そういえば、結局アンタら一緒に住んでんの?」

「何故かという…まあ言うより見てもらった方が早いな…」

「はあ」

「なあ最愛、そろそろ常盤台の寮に」

「超却下します。例えそれが大好きなお兄ちゃんの頼みでも超聞けません!!!」

「という事だ」

「一応さ、年頃の男女よ？　しかもアンタみたいな男と一つ屋根の下つてのが不安なんだけど」

「私はお兄ちゃんの事超信頼してますし。というかそうなるのが超希望なんですけど…」

「という事だ…ってそうなるのが希望ってどういう事だ！」

「こっついう事です」ギョッ

「あ、おいこら」

「あ、ちよつと」

「やっぱりこれが超こち良い、私の居場所です」

「だからオイ、傷が開くからやめろつて〜!!!」

「ちよつと！　コイツの傷が広がるじゃない！　やめなさいよ！
」!

ギャー　ワー　ビリビリー

「いいんですか、ほつといて」

「本当だったら怒るんだけど、彼らはちゃんと弁えてるさ」

「あの部屋を清掃するの、私なんですけど…」

「あれ？　毎回楽しみにしているのは誰かな？　そんなに不満なら他の看護師に」

「いいえっ、全然文句ないですよ！　それでは私は仕事があるので！」

「君とつやつは…」

A c t ・ 1 0 (後 書 き)

御坂美琴がログインしました

「そういえばお兄ちゃん、学校は超大丈夫なんですか？」

口の周りに着いたクリーム（ロールキャベツ味）をペロリと舐めながら最愛が言う。

「へ？」

「そうよ、なんか出席日数がどうのとかで大騒ぎしてたじゃない」

結局食われちゃったよと呆れながら御坂も続く。

「あ〜」

「やっぱり考えてなかったみたいですね、お兄ちゃんは」

「こいつはまあアホだから」

「酷い…」

「そろそろテストじゃなかったでしたっけ？」

「あっどうしよう…」

「まあ出席日数はどうにも出来ないけど、テスト勉強は私が見てあげてもいいわよ」

「おお、本当か御坂！！ ありがとう！！」

「ちよつと御坂！ 私がお兄ちゃんに勉強教えるんですよ！！」

「おいおい言い争うなよ。だったら二人してこの上条さんに教えてくれませんか？」

「「お兄ちゃん（アンタ）、中学生に教わることに対して超抵抗ないんですね（のね）…」」

「あー、そうかそうだよなー。じゃあしょうがない、一人で勉強

しますよ……」フンッ

「だ、駄目ですお兄ちゃん、一人でするくらいなら私が傍で超お供します！」

「そ、そうよ、私は別に嫌だとか言ってる訳じゃないんだから……」

……」シーン

「……お兄ちゃん？」

「お、おーい……」

そつだ！とお馴染の閃いたポーズをして

「あーあの部分、俺じゃ分んねえんだよな。そつだ、頭の良くて高・校・生の吹寄にでも教わろうかな」

「（吹寄……ってあの超巨乳の女っ！！ それは駄目だ！ そんな女に！）」

古傷が疼きだす二人。

「ごめんなさいお兄ちゃん、私が超悪かったです！ 全然年齢差とか気にしてないから！ だから！」

「人は得手不得手があつて、決して教え合つて補うことは全然ダメじゃないと思うの！ だから！」

どうか、どうか……

「……どうか吹寄さんだけはやめてください！！（胸とプロポーション的に勝ち目が無い！！）」

「まあそつだよな、得手不得手があつて当然だな。よろしく頼むよ」

「……よかった」「ホッ

」とは言つてもまだ。この場に勉強道具が無い。最愛、悪いんだけ

ど取ってきてくれるか?」

「お兄ちゃんの為なら超ダッシュで行ってきます!」 「ビュン

「相変わらずお兄ちゃんっ子ね、あの子は」

「いやいや、ただ単に困った人の為に動こうとするっていう、最愛の心優しい部分がだな…」

「アンタはやっぱり鈍感なのね」

「? 鈍感? 何が…?」

「あー、やっぱいいわ。私から話すのも恥ずかしいし…」

当麻の寮へと急ぐ最愛。もちろん能力を使っている。

地面を蹴る瞬間に窒素の膜を発現、軽く前に飛ぶ形となっている為、走るより何倍も速い。

兄が比較的無事だったという安心からか、パーソナルリアリティーも確立できている。

服装は、最愛の私服はもう着れない為、病院にいた御坂の妹から制服を一着借りている。

ので今は常盤台の制服。少し胸が苦しい。

『当麻の寮に行く次いでに着替えを持つてくる』

そう言うと御坂の妹が『またここで大きな差がっ』とか言っていた。ちなみに、御坂みたいに短パンでは無く、

ギリギリ見えそうで見えない短さのスカートと素のパンツである。

その為だろう、道行く人の視線が凄い。そりゃそうだ、風でスカートはたなびいている。

「街の男共から視線集めても超意味無いです」

だからと言って、部屋の中でこんな際どい格好をすると、

「お兄ちゃん怒りますからね…。最近はやうやく言わなくなりましただけ」

兄の鈍感さ故に悩む人は非常に多い。

が、それすらも兄は鈍感な為に気づかない。

救いようがないのではないか？

どうすれば見てくれるのだろうか…。

いつそ奇抜なファッションでも…？

と思っていると、青空を自動遊覧する飛行船のモニターに

『今年から試験的に開催される行事について

学園都市最大の花火大会、彩月花祭が一週間後に開催予定。

最先端の科学技術を駆使して作られた巨大花火6000万発を打ちあげる予定』

と映されているのが見える。

最愛は能力の発現を止めてその場に立ち止まる。

これだ！！

最愛はそう思った。

「そういえばお兄ちゃんってば、どこに勉強道具を置いてるんでしょうか…。」

寮について、部屋に入った途端にふと思う。聞いてこなかった。

「とはいええ、いつもだったらこのベッドの下に超滑り込んで…ないですね」

それからカバンやテーブルの下、本棚やタンス、ベランダに出て探してみるが見当たらない。

「…ん、って超発見しました。何故に冷蔵庫の中？」

色々の原因を考えていた所にインターフォンが鳴る。

ピンポン

「上条ー、上条いるかー」

「はい」

ガチャリと玄関を開けると、そこには清掃ロボに座る少女、土御門舞夏。

彼女も最愛と同じく、この寮にいる事を許された義妹である。

「舞夏、超どうかしたんですか？」

「あれ、最愛が出てきた。まあいいや、うちの馬鹿兄貴を知らないかー？」

「残念ながらさっき来たので、超お役に立てませんね」

「うーんそっかー。折角兄貴と来週の彩月花祭の事で話そうと思っってたんだがー」

「彩月花祭…」

「最愛はもちろん上条当麻と行くのかー？」

「まだ約束はしてませんが、超その予定です」

「服装どうするんだー？」

「そうですねー…」

Act・12（後書き）

オリイベ発動です。

でもこれ、大覇星祭と被ってるじゃん…と思ったけど、まあいいでしょう。

彩月花祭、ちょっと気にいってます。

「さいげつかさい」です。

この写真はよく撮られてるよ
C e t t e p h o t o e s t
b i e n r u s s i e .

A c t . 1 2 A l o r s

A c t . 1 2 A l o r s

「お兄ちゃんのお部屋に来てもうかれこれ一年と少しですねえ」

土御門舞夏と一通り話終わった後、
当麻の宿題や筆記用具、最愛の着替えやら必要な物をキャーリーケースに敷き詰めつつ、
ふと見上げたコルクボードに目が行く。

そこにはいくつもの、全てが鮮明な記憶で残る出来事の一瞬を切り取っている。

ボードの中心には同居生活の初日に撮った、恥ずかしがる当麻と最愛が写る写真。

そしてそれを囲う様に、これまで歩んできた春夏秋冬時折々の瞬間がある。

春。桜が舞う季節。

宴会で泥酔した刀夜を呆れ顔で見る最愛と詩菜。

最愛のお雛様コスプレを見て顔が真っ赤になる当麻。

制服で寮前に並ぶ当麻と最愛。

最愛の卒業式で大勢の女子生徒と写る当麻。

最愛の入学式で大勢の女子生徒とその母親と写ろうとしている（実際に当麻は突っ立っているだけ）当麻に怒りに行く最愛。

夏。多くの祭りがある季節。

笹の葉の先に背伸びをしながら短冊を結ぶ最愛。

日焼け止めクリームを持ち必死に否定している当麻。

海水浴場で他の男の視線も気にせず白い水着ではしゃぐ最愛。

手持ち花火で”好き”と文字を描く最愛。

秋。過ごしやすくもあり怠惰になる季節。

借り物競走でとにかく当麻を連れて行くこととする最愛。

当麻が腕によりをかけて作った重箱弁当。

それを満腹になるまで食べた挙句に運動が出来なくなり当麻に看病

される（結果オーライ）最愛。
紅葉で赤く染まる並木道で、紅葉を見上げる最愛。

冬。一肌恋しくなる季節。

ミニスカサントコスプレした最愛を見て顔を真っ赤にする当麻。
年越し蕎麦をコタツで肩を寄せ合いながら食べる二人。

初詣で振り袖姿の最愛を周囲の男（女も）が衆目している中、当麻
と腕を組みながら歩く当麻。

コタツで涎を垂らしながら爆睡している、顔に”アホ兄”と落書き
される当麻。

その当麻にそつと唇を寄せて撮った写真は最愛の思い出アルバムに
しまつてあるが。

そうしてその場その場の景色（二人）を写していく思い出。

時に当麻が見た光景、最愛が見た光景、刀夜や詩菜が見た光景。
見る人や撮る人を変え、季ときを記録していく。

「この人達が家族で本当に良かったです」

最初に会った時から、最愛に対して壁を作らず溶け込みやすかった。

「本当の家族なら・・・それこそ最高の家族だったのかもしれない
せんね・・・」

本当の母の親を、もう薄らとしか思い出せない。

それ以上に詩菜の顔が真つ先に思い浮かぶ。

本当の父の顔なんか微塵も覚えていない。

今は刀夜が父。そしてこれからも。

最愛は今までもこれからも、刀夜と詩菜を”親”として生きていく。

68

子供だった最愛を捨てた父も、それを最後まで止めてくれなかった
母も、

「私はそんな人を両親とは思えません」

子供ながらにでも思う。

親は子供を守るべき存在であり、それが出来る唯一の存在。

間違った道に行きそうなら正し、時に相談に乗る。親にはその責任
がある。

子供を捨てるとか殺すとか、そんな事をする奴は親じゃない。

子供にある程度の自由と約束を与え、
笑顔の絶えない家庭、食事が暖かい手料理、
そして子供に愛を向けるべき。

そんな理想はあの親達だった頃まで。
今はそんな理想を遥かに超える親がいる。

人にどれだけ嘘偽りだと言われようと、

「刀夜お父様と詩菜お母様が、私の一生の両親です」

その人達と一緒に、これからも思い出を増やしていこう。

勿論、

親だけじゃない。

私には、

上条当麻おにいちゃんがいる。

少しおバカで頻繁に補習に行ったり、
何をするにも女の子が付いてきたり、
お金が無い万年金欠ビンボーだったり、
顔が超ハンサムって訳でもない。

けど、

料理の腕前はそこらの店に負けてないし、
女の子に向ける優しさは本物だし、
貧乏なりにしっかりとした知識も持っていて、
いざという時の顔はイケメンなんて超目じゃない。

そんなお兄ちゃんを尊敬してるし、

お兄ちゃんですら良かったと思うし、

大好きだ。

「おっと、少し感傷的になりすぎて手が止まってました」

近くに置いてあった荷物を全部詰め、
キャリーケースの蓋を閉じて上に乗って中身を圧縮する。

「さてと……それでは行ってきます」

思い出をこれからも沢山作ってこのコルクボードをいっぱいにして
う。

A c t ・ 1 2 A l o r s (後 書 き)

” 家族 ” と ” 親子 ” が 今回の テーマ です。

空を見つめる少年、膝の上に置いた手を凝視している少女。

「
…」

沈黙が続く病室。とはいえ病室では静かにするのがマナー。

「
…」

元気と騒がしさを体現する女の子、御坂美琴は耐えきれなくなつて言葉を発する。

「ちよつと、黙るのやめてよ」

それをキツカケに当麻も口を開く。

「いやー、今までは御坂来てちよつとしたら帰ってたじゃん？

長居は慣れてなくて…」

「そりゃー私も慣れてないけど…、男だったら場を盛り上げるよ
うな話しなさいよね」

「と言われましても…、女の子と話が合う話題なんて持ってませ
んの事ですよ」

「ん〜、じゃあそーねー…彩月花祭って知ってる？」

「それって確か今年から試験的に始まる花火大会的なやつ…だっ

たよな」

「そうそう。それなんだけどね、今女子寮で話題になってるのよ」

「そりゃあなんつっても6000万発だっけか？　いくらなんでも多すぎだもんな」

「そういつ事じゃなくて…」

なんでわかんないかなあとつくづく思う。

「どついつ事？」

開いていた手をギュツと握る御坂。

「ねえ…一緒に見ない？」

「一緒ねえ…。俺なんかと見るより白井だとか、学校の奴と行った方が面白いんじゃないの？」

「はあ、言わなきゃ分らないかな」。アンタと行きたいって言うてるの」

「…上条さんとしては嬉しい限りですが…、もっと一緒に見るべき人ってのがだな…」

「それがアンタだって言ってるの。アンタと見るべきだって私は思ったんだけど？　嫌だった…？」

「嫌じゃない。嬉しいんだけど…」チラッ

何故かはつきりしない言葉。

「だけど…？」

「貴女様の後ろに…」

断られるのではと思っていたのだが、嬉しいと貰えてうれしい御坂が、しかし当麻が御坂の背後を注視しているので振り返ってみると…

「ほほー、御坂…抜けがけですか…。そしてお兄ちゃん…私という超可愛い妹がいながら…」

「いくら御姉様でもこういう重要イベントは譲れません、とミサカは美味しい所に出てきます」

「お姉様、寮にいないからいつもみたくココだと思って来てみれば…」

どこから嗅ぎつけたのか、さらにハンターが現れる。御坂はこうして、いつもチャンスを逃す。

「なんでアンタらはこういう時にいい！！！！！！」

ギャーワイヤー

「なんだ上条、大怪我で倒れたって言うから来てみれば…貴様また女事か！」

「げっ…吹寄…」

A c t ・ 1 3 (後書き)

御坂妹、白井黒子、吹寄制理がログインしました

「吹寄と白井と御坂妹、お前らもどうだ？　一緒に彩月花祭見に行かねえか？」

上条のベッドを挟んでギャーギャーと文句を言っていた5人の女の子のうち3人、つい先ほど入ってきた彼女らに、その話題の中心人物が口を出す。

「なんでその結果に落ち着くのよ！！」

「そうですよ、お兄ちゃん！！」

「だつてお前ら、ここでずっと文句言つてて収まんねえし。だつたらみんなでワイワイ見に行こうぜっていう話よ」

「私はお姉様さえいれば他に誰が居ても構いませんの」

「私は貴方さえいれば他に誰が居ても気にしません、とミサカは大胆にぶつちやけます」

「このメンツで貴様が羽目を外さないとは思えないからな、つい行つてやる」

「よし、じゃあ決まりだな」

「ちよつと！　私は嫌！！」

「そつか、じゃあ仕方ない。こつちのメンツだけで行こうぜ」

「えっ」

それから最愛と御坂が当麻に縋りついてお願いしていたのだが、その時は二人とも意識はしなかったようだ。

むしろこの時の当麻はものすごく意識していたのだが、互いに意識しあふ事はいつになることやら。

「え〜色々ありました、やっぱり皆でワイワイ行く。集合場所は…追々メールする」

「………りようか〜い!!!」「……」

「つと…なんだかんだでもう夕方の方の7時…。時間が過ぎるのは早いですわね〜」

「あ、そういえば勉強やってねえ…不幸だ…」

「貴様、やはりやってなかったか…。しょうがない私が教えてやる」

「ふ、吹寄さんはもう帰った方がいいんじゃないですか？ 寮の人が超心配しますよ？」

「大丈夫だ、いつも真面目だから連絡を入れれば数回の門限破りも許される」

「私はここに床を構えているので、私もミサカネットワークと学習装置をフルに使用し、貴方をサポートします」

「私はもちろんココに超居座りますよ」

「わ、私も…」

「お姉様は流石にまずいです。寮監が今度したらタダじゃ済まないと言っておりましたので、今回は素直に帰りましょう」

「私だけ帰るの嫌なだけど!!!」

「大丈夫ですよ、私も帰りますので」

「ちよつと黒k「それではお邪魔しましたです。上条さん、ごきげんよう。また今度」

「おう、じゃあな御坂に白井」ノシ

シユン

「さてと…、んじゃ始めますか。皆さん、こんな情けない上条さんを助けてもらって申し訳ありません」

「貴様がクラスにいなくなるのは寂しいからな。私も協力してや

る」

「吹寄さんは超協力しないでもいいです。どうせ胸が重くてすぐに疲れちゃうんでしょうし？」

ギヤーギヤー　ワー

「さてと…、ライバルが今いい感じに向こうで言い争っているの
で…」スツ

御坂妹は靴を丁寧に脱ぎ揃え、ベッドの上に入り、ススーと上条のすぐ横にまで歩み寄って座る。

「なして俺の真横に座るんでしょうか？」

「貴方は私に問題を見ずに口だけで説明しろと言うのですか？
それでもいいですが、貴方が言葉だけで理解できると？　でももし
貴方が、私が口で言った事を理解して行動に移してくれるというの
なら、一つ聞いていただけますでしょうか？」

「上条さん、今ココロがズタズタなんです…。まいいや、何だ
？　上条さんはちゃんと聞く耳を持っていますのことよ」

ぐいっと顔を当麻に近づけ、

「これから個人授業でもしませんか？とミサカは至極真面目な顔
で真剣に貴方に詰め寄ります」ズズツ

「わ、ちよつと！」

傷が開く可能性、点滴や電極での拘束、唇と唇が接触しそうな距離
への焦りが合わさり、身動きが取れない当麻。

「そもそもその胸は何を越えようとしたらそうなる…って御坂の妹！ お兄ちゃんに超近いです！！！」

「っ！！ 早速貴様というやつは…！！！！！」

「えっ！？ 吹寄さん、怒るの俺？」

そんなこんなで全く空欄が埋まらない。

けども何だかんだで面白いこの雰囲気不堪なく好きな当麻だった。当麻が守りたい『周りの世界』。

それはもちろん身の回りに居る友達（女が大半）の世界をも守るといふ事。

その人達の笑顔と幸せは守ると決めた。（大半の笑顔と幸せの矛先が当麻だとは本人は知らない）

「今こうしてみんな笑い合ってる…。それが出来てるってことはちゃんと守れてるんだな」

決して自分の力を過大評価してるわけでは無い。

でも守る上で『能力を打ち消す能力』というのは一番最強の武器になる。

当麻としては、そんな事は気にせず思い立ったら吉日なので『能力』はそんなに関係ないのだが。

「ってちょっと待て、夕飯は！？ 不幸だー！！！」

いつもいい雰囲気な病室を恨めしそうに見ている看護婦は夕飯を出すのを忘れていたことを忘れていた。

「さて、結局テスト勉強を一つも終わらせること無く、10時ですよもう!!」

「上条スマン…」

「お兄ちゃん、超すみません…」

「申し訳ありませんでした、とミサカはお詫びに私を今日一日…いえ、一生自由に酷使できる権利を　あたっ」

ぺしつと吹寄がテキストを丸めたもので軽く叩く。

「馬鹿者！　その歳で何という事をいう！　これも全部貴様のせいだーっ!!」

「凄い理不尽っ!!　つと、そろそろ静かにしなきゃマズいな」

もうとつくに消灯の時間だったりするのだが、この部屋だけ堂々と電気が付いていたりする。

いつもこんな時間まで大騒ぎする上条兄妹の為に、この部屋だけいつでも電気が点けられたりするという特別仕様。

「でも流石に吹寄は帰らないとマズいな…。襲われたら敵わないもんな…」

「なっ、上条、心配してくれるのか…」

「ムキーっ、さつきから私が超空気です!!」

「仕方ありません、私が家までお供します、とミサカは点数アップの為に名乗り出ます」

「点数アップとか言われたら超黙ってられません。私も超行きま

す！」

「すっごくありがたいたいんだけど、できればその点数アップを上条さんのテストにだな…」

「それでは超行きましょう、ダッシュで行きましょう」

「さつさと帰ってきてきて先ほどの続きを…」とミサカは準備体操を終えてクラウチングスタートの体勢になります」

「…では（超）行ってきます」「ダッ

「もうね、俺の話は無視ですよ…」

吹寄の家へと向かう三人の女の子。もちろんその途中で話はガールズトークへ。

「吹寄さんは…どうなんですか？」

「何を？」

「超お兄ちゃんの事です」

「私も聞きたいです、とミサカはあの方との関係はどうなのかと尋ねます」

「…大切な…」

「…」

「私にとって、上条は大切な人」

「…」

「どうしてそう思うのかは…言えない」

「なるほど…」

「そこまで本気だと、ミサカは判断しますがよろしいでしょうか」

「ええ」

「それでは超恋敵っていう訳ですね」

「ふっ」

「何を笑っているのでしょうか、とミサカは不適な笑みに邪悪な念が含まれている事を察知します」

「上条はね、胸がある女の子が好きなのよ！」

「な…!!!…!!!…!!!…」

「残念ながらあなた達は無いように見えるから？ 私の圧勝でしょうね」「フフン」

「（グハッ！！）」

「あら、私の家に着いたわ。ここまで護衛、ありがとうね」
フリフリ

「ぐぬぬぬ…」

「何故こうなった…」

帰ってきた最愛と御坂妹。

その目は何故か燃えていて、

「今日は徹夜です。もちろんピッタリキツカリ密着して超勉強しますよ、お兄ちゃん」

「この状況、病院に長く居れる私達だからこそ得られる高感度があります、とミサカは高らかに勝利宣言させてもらいます」

もちろん徹夜で徹底的に教わる。

今まで何回か勉強会（当麻への）が行われたが、ここまで気合が入った事は無かった。

・月曜日

「上条さん、朝です…よ…」

朝、上条の病室を訪れる看護婦。

彼女はスライド式の扉を開けて真つ先に窓へと向かいカーテンを開ける。

朝日と共に彼女に降り注ぐのはそう、上条の寝顔。

他の看護婦から羨ましがられる「上条の寝顔」を見るために、毎朝真つ先にこの病室に来るのは秘密だったりする。

あの医者に「上条さんが入院したら連絡ください、いつでも飛んでいきます」と言っつて、他の看護婦と差を離れた。

そこまでして来たこの朝。この病室。この寝顔、と横に寝る二人の少女…。

「…」

それは無言になるはずだ。

確かにいつも横に一人寝ている、最愛という子が。

それはまあ色んな理由があるけどまだ良いだろう。まだ。

だがしかし、今日もう片方で寝ているシャンパンゴールドの髪の女の子は別だ。

ミサカさんだっつたっけ？たしか10032号とか言われていた子。

何故一緒になっつて寝ている？

それでなんだ。何故両サイドから上条は手を握られているんだろうか。

何をツッコむべきか迷っていると、その張本人が起きる。

「ん…ふわあ…。あ、おはようございます…ってあれ、目が擦れない…ってええ!？」

「…お兄ちゃん、昨日の夜は(勉強の)しすぎで疲れたんだからもつと寝させてください…」

「おはようございます、とミサカは寝起きから貴方の側に居れる事に今まで味わった事の無い感情が胸に流れ込みます…」

「…ただ一つ言うのであれば…」

「上条さん、不純ですく!!!」 「イヤ」

「一応、朝飯は貰ったけど…看護婦さんが一度もこっちを見てくれなかった…」

「あれお兄ちゃん、そこで悔しがってるのはどついう事なんですかね。超説明求めます」

「こつやつて既成事実で固めていく事こそ、恋愛の必勝条件です」

はあ、とため息をもらす当麻。

ツツコむ気も失せているのでそそくさと食事になりつく。

「くぐうう〜」

これは当麻の両サイドから聞こえた音。

「そついえば、昨日の昼から何も食べてないですね」

「私も言われてみればそつでした」

そついう二人は当麻の病院食を凝視、もとい要求している。

「まさか、あわよくばありつこつとか思ってます?」

「いやいや、まさかそんな事は…」ダラー

「“あわよくば”ではなく、要は目の前でミサカが要求しているのだからくれたっていいじゃないかという確定事項です」

「いやいや、お前らは歩けるんだから何か買いに行ってきたさい

「!」

財布から1000円渡して、病室から追い出す。
そこでやっと一人になった。

「ふう。静かだなあ」

シンと静まり返る病室。日々家事や追いかけてここに忙しい当麻にと
って至福の時間だ。

「さて、時は金成り、ちゃっちやとやりますかね」

コツコツと病室に響く。

「ふふふん、ふふふん、ふんふんふーん」

一時間後…

「はあーまあーずうーらああ！！！」

「だあーすいませんすいません、今行くからそんなに急かさないでえー！！」

「顎で使われているはずらを、私は応援する」

「また当麻は入院して、どんだけ私達に会いたいのかしらあ？」

「結局、上条に会いたいの私達だった訳で……」

「フレンド……あとでオシオキだから」

「相変わらず皆さんは変わらないですね。もちろんバカ面はより

一層深みを増して超バカ面になりましたけど」

「駄目だ、俺の味方が一人もいない……。おい上条、助ける」

そもそも当麻の周りに静寂なんて言葉は存在しない。

一過性のもものだ。

A c t . 1 7 (後書き)

麦野沈利、滝壺理后、フレンダ、浜面がログインしました

「（…私だけ超楽しくないです）」

イチャイチャイチャイチャイ（ry

とするのは、麦野沈利、滝壺理后、フレンド「セイヴェルン」
皆が皆、最愛と同じく馬鹿をやった集団だ。

なんだかんだ言いながらも仲良しなのだ、一つを除いては。

「とうまあ？ 私の差し出すリンゴが食べられないとお？」

「いや、もうこれで79個目ですよ、麦野さん…」「ウツ

シヤリシヤリと、浜面が持ってきた大きい段ボールから出したリン
ゴをむき続ける麦野。

アイテムを引き連れるリーダーなのだが、その面影は微塵も感じら
れない。

というか、アイテムのメンバーとしてはその180度違う麦野に慄
いているのだが。

そもそもリンゴの皮を剥くのは器用な癖に、恋愛表現は不器用すぎ
る。

それでも彼女は乙女。レベル5の”原子崩し”。

決して化粧が崩れてるとか言っちゃいけない。おっと誰かがこつち
を睨んでいる。

決して老けてる訳じゃない、年増なだk…おっと誰かがビームを放
ってきたようだ。

「吐きそうになりながら、でも麦野に断りきれないかみじょうを私は応援してる」

「滝壺さん、ありがたいです。背中さすってもらって…」

そんな不器用な麦野と打って変わって、積極的な滝壺。

聖母のような眼差しと手当てで当麻を癒していく。

巷では浜面の彼女という扱いを受けているが、実は”男(当麻)を虜にする為”のただの実験台である。

浜面も実は分かっているのだが、それでもアイテムで唯一の癒しである滝壺の実験台にならざるを得ない(他の二人は浜面をこき使うから)。

ちなみに彼女の能力、”能力追跡”はもっぱら上条当麻専用位置測定機となっている。

ただ、当麻自身の不幸があつてなかなか会えないのだけでも。

「上条はデレちゃって…じゃあ私もって訳よ」

「だあー、おいフレнда、脚に乗るな」

病人の脚に遠慮なく飛び乗るフレнда”セイヴェルン”。

ご自慢の美脚を何度も当麻にアピールしているのだが、全然見向きもしない。

やっぱり男は胸なのか？と必死に自分の胸と相談している健気な子。能力は…本人曰く秘密らしいのだが、それでもこのメンツに居るのだから強いのだろう。

自作爆弾を作るのが得意なようで、よく当麻のお見舞いケーキに簡易爆弾を入れて怒られる。

ぬいぐるみが大好きな、多分まだ中学生。

お気に入りハリネズミのぬいぐるみは、果たして最初から好きだ

ったのか、それとも…。

そして…ワーワーと騒ぐ一段を少し離れて見てるのは二人の男女。

アイテムのパシリとつっぱら噂の浜面仕上。

こんな美人と可愛い子に囲まれて悪さしてるとか許せない。

浜面だけでもいい。

ただ残念ながら、この物語では主役にならない。

そして、元アイテムの絹旗最愛。

「…絹旗ドンマイ」

「うわっ、何で超浜面なんかに慰めを…」

「んだよ、っていうか今お前だけなんだよ、今話掛けられる奴…」

「浜面…」

「絹旗…」

「っ超ーキモイです」

「んだよ畜生。あー何で滝壺ですら上条派かね」

「浜面派なんて一人も居ないですから」

「ちなみにお前は？」

「わざわざ聞きますか？ていうかお兄ちゃん以外の男とか塵も同じです」

「お前どんだけ諸行無常だよ…」

「そういう事ですから、私はお兄ちゃんを取り戻してきます」

「…お兄ちゃん、ね…」

上条を兄と慕うようになってから、絹旗は俺らとはつるまない。

(つるむと言っても、集まって馬鹿するようなそんな程度の低い集まりなんだが)
それが淋しくないと言ったら嘘になるのだが、それで良かったんだと思う。
絹旗は俺らの誰よりも先に”自分の在るべき居場所”を見つけた。
が、こつ…傍から見れば度が過ぎているように見えるが、
元々、絹旗は親に捨てられた”置き去り”(チャイルドエラー)。
親を嫌う一面、親との生活を望んでいた面も持っていた。
だからこつも甘えているんだろう。
自分の素を出せる、そんな場所を見つけたのは絹旗だけだと思っ
ていた。

のだけれど…、

今のこの通り、女性陣全員がそんな場所を見つけたらしい。
そもそも、このグループに女四人男一人というハーレムな環境に調
子に乗っていた部分はあった。
だから今俺は一人ぼっちだ。
べつ…別に…寂しくなんかないんだから。ないんだから…、グスッ。

「ねえ、浜面が泣いてるんだけど…どういう訳…?」
「そんな気持ち悪い浜面はちょっと応援出来ない」
「みつともねえ野郎だな、部屋の外で泣いてこい、空気壊すな」
「うええ…なんか浜面が超バカ面で泣いてて気持ち悪いです」
「ちよ…腹乗られるとリンゴが…うっ…」
「上条、大丈夫?」サスサス
「上条ばっか卑怯だろ!!!」

「浜面、しつこいしつるさい。じゃあ」

「ううう…えっ？」

上条が滝壺に背中を摩られつつ、その声をした方を見やるとそこには…。

「はじめまして、フレメア＝セイヴェルンです。あなたが上条当麻でいいんだよね？」

10歳前後の少女立っていた。

白やピンクのフリフリミニドレスに真っ赤なタイツ、腰に大きい赤いリボン、頭には赤いベレー帽。

見た目からして熱くなりそうな暖色系のみを纏う、まるで人形のような女の子。

そこに金髪白肌青眼という、最早パーフェクトなお人形さんスキルを持つ。

「おお、俺がそうだけど…ってセイヴェルンって事はフレンドの妹？」

「そうそう、私の妹って訳よ」

私に似て凄く可愛いでしょ！？と遠まわしに言っているフレンド。

当麻がフレメアを姉と似てるなあと思いつながら見ていると、フレメ

アはとてとて歩いてくる。

「どうした、フレメア…だっけ？」

自分の前で立ち止まりじーっと品定めするように全身を見てくるフレメア。

「…浜面より全然強そう…」

「へっ…？」

「駒場のお兄ちゃん…よりかも」

当麻自身は気付いてないが、不良や御坂とのヤケクソ徒競争や主婦との食料調達戦、数々の乙女の猛アタックなど、色々な修羅場を毎日のようにくぐってきているので、身体の筋肉の付き方が凡人のそれとは違う。性格の良さに合わせ、逞しい身体を持つ当麻、それは乙女を落とすのに申し分ない”能力”なのかもしれない。

「うん、決めた」

「は、何を…」

当麻の声を聞かずに、フレメアは靴を脱がずに上条のベッドの上にポンと乗ると

「ちゅっ」

「はい!?!」

「「「「「んなっ!!!!!!!!!!!!!!」」」」」

子供の悪戯程度だし、フレメアが金髪なのもあって外人特有の挨拶程度に見えた。

それが頬ならば。

真正面、上条の顔を押えての唇へのキス。見方によっては犯罪者だ。

「「かぁ〜みいじょおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」」

声高々に叫ぶ麦野沈利と浜面仕上（更なる孤独感から）。

「フレメア何やってんのよ!?!」

色々と妹に先を越されて焦るフレнда「セイヴェルン。

「（くっ…先にやられた…）」

下唇を噛みしめる滝壺理后。

「おおおおお兄ちゃん！ 何私以外の人とキスしてるんですかっ!?!」

いきなり知り合いの妹に兄のセカンドキス（？）を取られてシヨッ

クの最愛。

グラウンドゼロ

このカオスとなった戦場、普通の人間だったならばここで終わる。というよりも、本当に普通ならこんなことにすらなっていないのだが（笑）

しかしそこは安心設計の（株）上条当麻 不幸建設。それで終わるはずがない。

病室の入り口にはさらなる女の子の影が。

「ほう、なるほど理解した。貴様は根底から相当重症なようだ」

今にも殴りかかるうとしている吹寄制理。

「ははは、そうよね、アンタに変な期待してた私がバカだった」

バチバチを通り越して耳を塞ぎたくなるような音を発す御坂美琴。

「まさか…という事は、これは20001号の方が有利という事になるのでしょうか？ と予想だにしない候補に愕然とします」

最早何を言ってるか分からない御坂妹。

「どうやら貴方は…いえ、もはや類人猿と呼び名に戻した方がよろしいようです…ねえ、そうですね」

鞆からガトリング銃の弾のような、ベルトに鉄矢が無数に詰ったの
を出し始める白井黒子。

少年に幸せは長く滞在しない。
幸せとは一過性の物なのだ。

拝啓っていつかもうヤバイので前略親父。

不肖…それこそ超がつくほどの愚息な私上条当麻ですが、
どうやら陽の目を見る事はもう一生無さそうです。

私の何がいけなかったのでしょうか。

やはり私は周囲の人間に不幸を振りまくのでしょうか。

P S / モテたかった…

その日、フレミアは「知ってはいけない学園都市の闇」を見た気がした。

Act・19 (後書き)

フレメアがログインしました

駒場利徳はこの作品では死んでません。出番無いですけど

・水曜日

二日後、当麻は物凄い眩暈と共に起きた。

「いてて…。眩暈と共に起きるのは辛い…」

丁度そこに巡回に来た医者 came。

「まだ動かない方がいい。昼ドラで出てくる殺傷方法全部試されたみたいなのを負ったんだからね」

「あゝまだ頭くらくらしませぬ」

「そりゃそうさ、君はこの二日ずっと危ない橋渡ってたんだから…」

うわぁ…と本当に自分は危なかったんだなと理解した顔の当麻。

「あ、最愛は？」

「なんだかうちの看護婦と意気投合しちゃってね、この二日間はずっと一緒にいて食事も取ってるよ」

「飯とか気になってたんですけど…食べてたんなら安心です」

「この費用はいつもの請求よりも高めだから」

「えええっ!?!」

「ちなみに、この間一人も見舞いには来てないからね」

「相当嫌われたんですね…」

「ま、そんな事は無いとは思っただけだね。ちょっと彼女達も引
つ込みつかなくなってるんだろっさ」

「さいですか…」

ふと、上条にではなく誰かに言うように医者は口を開く。

「さて、一番先にやってくる子は誰かな？」

「…？」

ガタツ バサツ ドサツ ガララ…

「お兄ちゃ「上条のお兄ちゃん！」」

「ありゃ、フレミアちゃんが一番乗りだったようだね。さて、私
はここで失礼しようか」

「ごめんなさい、大体、私のせいで…」

「あの時は超取り乱しました。反省してます」

「いいよ、まああれは…な」

「上条のお兄ちゃん、死んじゃうかと思いました…」

「参加してた私が言うのもあれですが…本当に心配しました…」

「ま、無事にこうしていられるんだから、良しとしよう」

そっとう当麻の顔は別段怒ってる訳ではなく許している顔。

「「お兄ちゃん」」

ガバツと、当麻の容体を気にすることなく抱きつく二人。

「痛い…痛いですよ、御二人さん！」

とはいえ、二日もの間こんなに心配してくれてる子が居てくれた、

その事で少し感慨深くなり、ありがとこの意味も込めて二人の頭を撫でる。

「やっぱりこれです」

「にやあ〜」

「君たちは行かなくていいの？」

病室の外、医者の後ろには看護婦とあの日フレミアに闇を見せたメ
ンツが勢揃いしていた。

そこに居る誰もが今の状況には手を出さない雰囲気なのは分かって
いた。

「先生も意地悪いですよね、今まで面会させなかったのに今日い
きなりこの子達に連絡入れろって」

「しょうが無いじゃない、流石にあれはやりすぎだと思ったから
反省して欲しかっただけだよ」

「って先生、また来てますよ、あの子達」

「いいんだよ、呼んだんだ」

「そっだ、お兄ちゃん！」

ガバツと当麻の顔を見れる位置まで顔を上げる。
撫でられて心地良かった事ですっかり忘れていた事を今思い出す。

「どした？最愛」

「あと4日ですよ、彩月花祭！！」

「ん、そっだな」

その言葉に、

「さいかげ…？」

慣れないそれに、頭の上に大きなハテナマークが出るくらい悩んでるフレミア。

「ああ、フレミアは知らないのか。大きい花火大会だよ」

「はなび？ みたい！！」

駒場や浜面に、危ないからと手持ちで小さい物しか花火はやらせてもらえなかったので、

大きいと聞いてぴよこぴよこと跳ねて嬉しさを全身で表現する。

「じゃあフレミアも一緒に行くか？」

「ほんと？ 上条のお兄ちゃんが守ってくれる？」

「なんだつたら屋台で美味しいもんいっぱい買ってやるよ」

「やった〜」

「あれ、でも金が…まあいいや」

目の前で期待されてて、今更所持金ゼロでしたなんて言えない。
多分…多分だけど、まだ口座にある…ハズ。

「お兄ちゃん、私はそんなんじや釣られませんかから」

出合いが出会いだつた為、最愛としては当麻に”食い物でひよいひよい釣られるような女”には見られたくない。

「そつか、じゃあ温泉旅行は無しだな」

「へっ？」

花火から繋がる筈の無い単語、”温泉”というフレーズ。

それはこの病室に居る女の子もとい乙女は聞き逃さなかった。

もちろん、それは部屋のすぐ外に並ぶ例の彼女達にも聞こえている訳で…。

「「「なん…だと…!?」「」」

「いやね、なんでもビンゴ大会があるんだと。その彩月花祭のお祭りで。その特賞が温泉旅行なんだってさ。とはいえこの不幸の申し子上条さんがね、ビンゴなんてした日にはそりゃあ結果は目に見えてる訳で…。そこで運を沢山持つてる最愛に頼もうとしたんだけど…釣られないと言っならしょうが無い。ビンゴ諦めるか」

「いえいえ、そんな事ならわ「ちょっと待った〜〜!!!!」」

扉から続々と出てくる人人人（全員女子）。

これは聞き伝手ならないと思ったのか、雪崩れ込んでくる。

「おお、なんだ、皆居たの？」

「私達が悪かった。調子に乗った。だから！」

「そのビンゴで温泉旅行を」

「上条にあげる」

「ま、そんなもの無くてもお金あるから行ける訳だけど…」

「フレンド、オシオキだから」

「これは罪滅ぼし…いや、もとい聖戦とでも言うべきですの」

「違う意味でも…とミサカは意味深な事を言います」

「みんな乙女だ、にゃあ」

「さつきからなんで私のセリフの途中で…」ハア…

「まあ、皆さんお元気でなによりです、ハイ…」

「流れるに強引にアイテムの皆さまの参加が決定したのですが…」
もちろん浜面は居ません。

「あれえ、かあみじょ〜う、まさか私達だけ除け者にしようだな
んて思ってた？」

「そんな上条は…流石に嫌っちゃう」

「上条にとって私達アイテムはその程度だったと…そういう訳で

すか…っはー」

「いや、正直…俺から誘おうと思ってた。サプライズで。けどこ
うやって知られちゃったか…」

三人としてはそういう反応は期待していなかったようで、

「いや、今知った。今だよ今、なあ、フレンド？」

「そ、そうです、今上条の口から聞きました!！」

「そんな上条はやっぱり大好き」ギョ

立っている滝壺がベッドで上体だけ起こしている当麻に抱きつくと
どうなるか。

「あれ、滝壺さん…しばし形容し難い物が上条さんの顔を覆って
いるのですが…」

「がぁー!!! ちょっと許せばすぐこれですか滝壺!！」

「そ、そうよ。というかアンタも早く離れなさいよ!！」

胸では勝てない女子は各々苦虫を潰したような顔をしている。

「(やはり上条は胸が…)ってというか貴様、不埒だぞ!！」

「これはもう700本ほどのお灸を据えなければいけませんね、
類人猿さん」

「何でもこういう展開にする貴方を尊敬します。とミサカは今日
も平和だなーと呑気な嘘をつきつつ後ろから抱きつきます」

「御坂妹、頼むからややこしくするな…ってホラ、また上条さん
を見る皆さんの目が…」

「ゴミムシを見るような…というより視線だけで国滅ぼせるぐらいの
熱量に耐え切れずにあわあわしていると…」

「そこまでーって、ミサカはミサカは命の恩人さんの命の危機に
参上してみたり！」

Act・21（後書き）

最愛との”食での出会い”は、また後日、別の章で書かさせて頂き
ます。

著者的に、麦野>吹寄>滝壺>一越えられない壁->最愛>190
90号>御坂II御坂妹>フレンド>フレミアだと思って書いてます。
え、何がって？なんだか考えてみてくださいw

ちなみに雪崩れ込んでからの喋った順は御坂の「ちょっと待った」
から、麦野 吹寄 滝壺 フレンド 麦野のお怒り 白井 御坂妹
フレミア 絹旗です。

これを初見で次の行見ずに誰喋ったか全部分かる人いたら、もう貴
方が書き手ですw

「そこまでーって、ミサカはミサカは命の恩人さんの命の危機に
参上してみたり！」

おい、また増えたぞという皆の視線が病室のドアに注がれる。

そこには20001号、いわば妹達の総括、打ち止めと呼ばれる子
と、

「おい上条、お前は親から病室では静かにするって事を教わんな
かったのかよ？」

白い髪、白い服、白い杖の一方通行がいた。

厨二全開なのか、病室の壁に寄りかかっているその様は、

そこにいる誰もが『雪国モヤシにそっくりだ』と思ったのは言えな
い。

「さりげなく、お前ら今失礼な事考えてたなア、オイ」

「そんな事はどうでもいいの、それより彩月花祭に行くんでしょ
？」

「おう」

「だったらミサカも連れてって欲しいかも」

「あれ、だって一方通行が居るじゃん」

「確かにこの人と行きたいんだけど、当日は精密検査があつて病
院から出られないの」

「情けねエ話だよなア」

「で、ヨミカワは当日警備で忙しいんだって。だからミサカは一

人になっちゃうの」

「それじゃあ仕方ねえな、じゃあ打ち止めも参加つちゅー事で」

「さて、久々に発言権を得た事なので、勢いついでにお兄ちゃんに聞きます」

「なんででしょうか、最愛さん」

「お兄ちゃんは彩月花祭、何人と一緒に行くんですか？」

手を広げて指で数えていく。

1、2、3…9、10…

「最愛だろ、御坂姉妹（多分三人）、白井、吹寄、麦野、滝壺、フレンド、フレミア：10人だな」

「お兄ちゃん、なんか変だと思わないですか？」

当麻は言われて気付く。

「変…あ、男が俺しかいない事か？ なら大丈夫、浜面が…」

いつから居たのか、ちゃっかり浜面も病室にいる。
もちろん、アイテムのパシリとして。

一同からものすごく刺さる視線を浴びる浜面。それは戦車を前にした蟻のよう。

「いや、上条…俺は遠慮させてもらっつ。ちよっと駒場さんと飲み

会があるんだその日。だから遠慮させていただきます」

当たり前だよ、と皆の視線を浴びる浜面。どれ程の威圧なのか。

「まあそれが変わって訳ではないんですが…まあ何言っても無駄です、ね、もう」

「？」

「さて、そろそろ面会終了時間、もとい消灯時間です。皆さん今日は解散しましょう」

そう最愛が言うと、他のメンバーも帰り支度を始める。

「そうね、そろそろ帰りましょうか、ほら黒子、行くわよ」

「つつい今日長居してしまいました。これは寮監が御怒りになるでしょうね…」

「今日は帰るか。貴様、おとなしくして彩月花祭に備えるんだぞ。体壊したら元も子も無いし」

「そうですね、夜は忙し…おっと、そろそろ調整の時間です。とミサカは覚悟しておくようにと言葉を残して今日は帰ります」

「さー、片づけしてちゃっちゃんと帰るぞ、おい浜面さつさと片付けろ」

「ええ、俺かよ…。あ、いえ、やらせていただきます」

「おとなしくして元気になって、私の美脚をマッサージしてください」

「私もやってもらおう、にやあ」

「上条、病院抜け出してもすぐ私の能力で分かるからね。逃げ出しちゃ駄目だよ」ポンポン

「それまではミサカとモヤ…じゃなくて一方通行でお話ししてあげるから」

「モヤってお前、次に来るのは“シ”か？ オイ！」

捨て台詞のように各々が吐き捨てながら病室を後にする。

滝壺と吹寄以外、当麻の体調は心配していない。

何故こうも皆、自分に尽くしてもらおうと考えているのだろうか…。
そう考えるとなぜか当麻の景色が霞んだ。

「…」

そしてやっと、

やっと、やっと病室が静かになった。

「いやいや、私は超えますけど」

A c t ・ 2 2 (後書き)

打ち止めがログインしました。

最愛以外のヒロイン(とモヤシとパシリ)が総ログアウトしました

これ以降は一時的に登場人物少なくて書きやすいですw

さあ、これからが最愛のターンです。

いや、最初からずっと最愛のターン!!

「やっと二人きりになれました」

その時を待ち望んでいたかのように、

「…ちよつとその発言はいかな物かと」

歯車は回りだす。

「あれ、お兄ちゃん、超変な事を想像してますか？」

それはとてもゆっくと、
しかししっかりと、別の歯車を捉える。

「いえいえ、まさか」

「……いいんですよ？」

そう言って上条に近づくと最愛。

「最愛：そんな事するなって言ってるだろ」

「冗談ですよ。超冗談です」

「ならいいんだけどな」

「…なんでお兄ちゃんは私をそういう目で見てくださいか？」

「なんでって…妹だろ？」

「本当のじゃありません…」

最愛は俯く。

それは今さら覆しようの無い事実。

それは”兄妹ごっこ”をしている二人にとって立ちふさがる壁。

『でも』と当麻は答える。

「例え本当じゃなくても…俺は最愛を本当の妹以上に思ってるんだけどな」

それはもちろん本心から。

「もし、実の妹がいたとしても、それと同じくらいに…」

「そう…ですか…」

その当麻の家族を想う気持ちが最愛にはとても暖かくて気持ちよかった。

「そう言ってくれる人がいる…そんな場所が出来てよかったです」

「なんだよ、そう言っつてことはまだ俺は家族じゃないのか？」

また当麻に近づくと最愛。先程のような卑しい気持ちでは無い。

「いいえ、もう立派な私のお兄ちゃん、大切な一人の家族（違う意味でも）です」

「そっか。ありがとな」

もちろん当麻は（ ）の中は聞こえていないし、意識もしていないだろう。

けど、それが当麻に届くまで…

最愛は声を大にして言うだろう。

「大好きです、お兄ちゃん」

「おお、なんだいきなり…」

「超言っただままですよ。あ、そつだ」

「どうした？」

「今日、一緒に寝ませんか？」

「あれ、最愛さん、今まで一緒に病室のベッドで寝てたよな？」

「今日、一緒に寝ませんか？」

「…あーはいはい、分かりました」

「手、いいですか？」

「ほね」

当麻は右手を差し出す。

それは最愛を守る剣になれば盾にもなる右手。

それは不安をかき消し、安心を与える。

そして最愛と当麻を繋いだ赤い糸。

「はい…」

いつか言うであろう、プロポーズの快諾の言葉。

でも鈍感な当麻は気付かないだろう。

でも大丈夫だと、確信できる最愛。

当麻が回りださないのでしたら、

これからじっくりと、

最愛が当麻に近づいて、一緒に回ろう。

その距離は、今のようになく無いのかもしれない。

服が擦れ、互いに手を取るその距離にまで、

歯車を近づけよう。

「じゃあ電気消すぞ」

「いいですよ」

パチッ

近くに、月夜に照らされる当麻の顔がある。

もし…いや、将来こんな景色を見る時、

それはどれほど心が躍る事なのだろうか。

そう考えると胸の鼓動が止まらない。

「（寝れません…）」

「お、どうした？ 寝れないのか？ やっぱり電気つけようか？」

「んーん、超大丈夫です」

照れを隠すために最愛は当麻のシャツに顔をうずめる。

それが実は逆効果で、当麻の匂いが、温もりが目の前にある。

「（もっと眠れません…）」

それでも、

安心出来る存在に導かれて、静かに眠りにつく。

そういう時に限って、

「（駄目だ上条当麻、寝ろ、寝るんだ…!）」

と、可愛い寝顔が横にあるから、そしてさっきの最愛の唐突な好き発言に、

一人モヤモヤ悶々としている上条当麻だった。

それでも最後は眠りについたのだが。

A c t ・ 2 3 (後書き)

上条さん羨まけしからんw

ニヤニヤしちゃっ自分がいますw

深夜、昼間の生活をする人間は就寝し、夜の生活をする人間は起床する頃。

そんな時間。

こそこそと、病室を歩く音。

その音で目が覚めた最愛。

「なんでしょうか…」

折角いい感じで当麻と寝て（抱き枕にして）いた最愛は、目を擦りながら上体だけ上げて室内を見渡す。

とそこには、大きな目のシルエットが二つ、こちらに近づいてくる。

「最愛ちゃん、久しぶり」

そんな声が響く病室は暗い。

こんな時間に来客は普通無い筈なのだが…。

しかし何故、その影は私を知っていて、なおかつ「久しぶり」なのだろうか。

その二つの影は、

最愛の横で寝てる上条には敢えて声をかけず、

最愛とだけ会話を進める。

「う…うん…」

「最愛さん、御目覚めですか？」

「お母様に…お父様も。こんな夜中にどうしたんですか？」

寝ぼけ眼で見た影、それは、

上条刀夜こと、上条当麻の父親であり、

上条詩菜こと、上条当麻の母親である。

最愛の本当の両親という訳ではなく、

上条当麻の両親なのだが、

今は”最愛の両親”でもある。

この親にして一子（当麻）ありとでもいうように、

見た目からして優しそうで、

もちろん中身も優しさで溢れている。

そんな二人がこんな夜中に何の用だろうか。

「ああすまない、二人とも空く時間がこの時間しか無くてね、お医者さんには許可は貰った」

「何か用ですか？」

「当麻の見舞いと…それと最愛ちゃんにプレゼントがあるんだよ」

プレゼント？と興味半分、少しの期待半分の最愛。

そついうと、最愛からお母様と呼ばれる詩菜は大き目の紙袋を差し出す。

「最愛さんに似合うと良いんですけど…」

そつと、大切なものを預けるように渡される紙袋。

紙袋を開けると白が基調の浴衣が綺麗に折りたたまれて入っていた。

「これは…？」

「私が今の最愛さんと同い年の時の浴衣です。彩月花祭があると聞いたので最愛さんの為に持ってきたんですよ」

「あの頃の母さんは可愛かったなあ…」

感慨深くなったのか、涙が零れる刀夜。

「あの頃は？」

『あの頃は』と言われた事をしっかりと記憶し、それを反芻する詩菜。

それと同時に、恐れ慄いたのか、涙が止めどなく溢れる刀夜。

「い…いえいえ、滅相も無い、今も…じゃなくてずっと可愛いです」

「あらあら、刀夜さんってば」

「…」

既知感溢れるコント。
しかしそれを聞いてるかと思えば、
実は全く聞いてない最愛。

最愛はその白い浴衣を優しく、しかしギュッと胸に抱く。
そして決意したようになにか呟くと、詩菜の横に行き何かを話して
いる。

「~~~~~」

「いいですよ、ではちょっと部屋を移しましょうか」

そうすると最愛と詩菜は二人で病室を後にする。

「当麻、起きろ」

上条刀夜こと当麻の父は、詩菜と最愛が部屋を出たあと声をかける。

「んー、あ…あれ、父さん？」

突然の訪問に驚いている…のだから寝起きの当麻。

「当麻、調子はどうだ？」

「ん？ 全然大丈夫だよ。明日ぐらいには退院できるんじゃないかな」

「そっか」

と話の途中にある事に気づく。

「ん…あれ、隣に最愛が居ない…」

「まーた当麻は最愛ちゃんと寝てたのか」

刀夜は顎をさすりながら、少し探っている。

「誤解招くような言い方しないでくれ」

「まあ分かってるよ。最愛ちゃんは今母さんと一緒だ」

「ああそう。それで何、どうしてこんな時間に来たの？」

「娘の最愛ちゃんに会いに来たんだ。ついでにお前の容体を見に来た」

刀夜：だけではなく詩菜も最愛を”娘”として接している。

それは気遣いとかではなく本心。

それが度を超えてどれだけ当麻に注意されたか。

というよりも上条の血筋全てが最愛を入れる事を容認している。

当麻としては最愛を”義妹”とカテゴライズしているのだが、

上条の血を引く血筋の総意は”上条家の跡取り（当麻の彼女）”。

それはそれは、一緒に住むとなった時は、

『上条親族一同を介してのパーティー（披露宴）』

なんて物を催そうとしていて大層当麻は困っていた。

話を戻そう。

「息子の見舞いをついでにすんのかよ」

「どっちかと言うと母さんもその意見だ」

「酷いな……」

「ま、それは冗談で、最愛ちゃんは大丈夫かなってな」

「結局最愛じゃねえか」

「これは冗談じゃないからな」

あ、そういえば！と続き、

「そういえば……丁度去年くらいだったろ、最愛ちゃんと暮らすって言い始めたの」

思い起こす、その場面。

「ああ」

「まービックリしたよ。いきなり女の子と同棲か？ってな」

「でも最愛はその時身寄り無かったし、状況が状況だった」

「ここで我が子だなんて思っるのは駄目なんだろうっか……」

話にもあったように、去年最愛と暮らし始めた。

その話の発端には一つの事件があった。

A c t ・ 2 4 (後書き)

次話のA c t ・ 2 5から、最愛との出会いを書きます。
というか、飽きられてませんか？心配です。

それと、今更ですが、

当麻の病室を訪れた女の子達、学校は大丈夫なんでしょうか。
…皆長期休暇だったということw

<最愛side>

“暗闇の五月計画”。

それは学園都市最強の第一位の演算能力を人為的に脳に送り込む実験。

私はその被験者だった。

何故か。

そのために親に棄てられた。

いや、

売られたのだ。

父は金使いが荒く借金に塗れ、

闇金に手を出し、賭けに溺れ、

人の理を外れて、闇に落ちた。

その時から、父は家族に関心が無くなっていった。

金、金、金、金、金、金、金。

金を得るために何でもした。

そう、私を学園都市に売ったのだ。

実の娘が、実験材料になる事を知った上で。

というよりもそんな誓約書など見ていなかったのだろう。

資料に書かれた数字に、まだ幼い私は負けたのだ。

親に学園都市に売られ、
強制的に運ばれた施設送られた。

それから何年だろう、

幼稚園にも小学校にも行かせてもらえなかった。

遊ぶ物も少し古めの物しか支給されないしテレビという娯楽も無い。

同じ施設の子と施設内でのみ遊ぶ事しか許されない。

だから私は、施設の裏にあるゴミ置き場から雑誌を拾い、
女の子らしい服装だったり、口調だったりを学んだ。

そこで私のこの見えそうで見えない服装と「超〜」という口癖が付いた。

そんなある日、

施設に客が来た。
身なりのいい男だった。

「凄い力を使ってみないか？」

それが男の最初の言葉。

同じ施設の子が聞いた。

「どんな力？」

男はニヤツと笑い、

「君達、アニメや漫画は読んでる？」

「うん、漫画は」

「それに出てくる人みたいに凄い力だよ」

そう言われて気を悪くする子供は居なかった。

ある子供は手をかざし見、ある子供はどんな力が欲しいと期待した。

「よし、じゃあ荷物をまとめて。今日中に出発しよう」

その日、施設にいる全ての子供が、研究施設へと身を移した。

着いてすぐ、服を着替えさせられ、変な薬を飲まされ、24時間監視の部屋に入れられた。

それから毎日、一定時間ごとに薬の投与と脳開発が行われた。

脳を弄るとどうなるか、それを嫌でも思い知らされる。

まず同室の子が暴れ始めた。大人しくて綺麗だった子が汚い言葉を吐く。

同じ実験室の子が大量の血を吐いた。白くて綺麗だった肌が赤く染まる。

能力が暴走し、皆が自分を傷つけ始める。

マトモじゃ無かった。

文句を言っても聞き入れてくれない。

それどころか薬の量が増やされた結果、ボロボロになる。

Act・25（後書き）

本編（原作）では描かれていない最愛の過去。

チャイルドエラ
”置き去り”だという事だけを元に、作ってみました。

ここで散々書いた揚句、本編では180度違うとかだったら笑えるW

それと、最愛の服装と口癖の原点も盛り込んでみました。

どうですかね、自然ですかね？

最愛の母は多分最愛に似て美人&可愛いと思うので、悪者には父親をW

今頃母親はどうしているのでしょうか。今後書けたらいいなあ。

ずっと考えてましたが、ユニークがそろそろ10000なので、これ
れが15000になったらAct・0を貼ろうと思います。Act・
0は土曜日の朝のお話です。

外を見るための窓は無く、鉄の扉と鉄の壁。

外部からの情報を一切遮断し、陽の光は照らさない。

鉄は鈍く光り、その様はまるで”暗闇”だった。

その一室。

私たち子供は、鉄で出来た冷たいベッドに横にされ、
頭や腕、身体全身に色々なケーブルをつなげる。

それはまるで怯えている子猫のような。

「では始めよう」

そんな声が、部屋の隅のスピーカーから聞こえると、
私の脳に強い衝撃が加わった。

幾度目かも分からないぐらいに脳開発され、その日もまた、脳開発をした時だった。その最中、意識は普通無いはずなのにガラスの向こうの声が聞こえた。

「もうこれで何人目だ？」

「185人目です。そろそろ”材料”を増やした方がいいんじゃないでしょうか」

「じゃあ次は候補6の施設で」

「了解しました。一応念のため候補7にも連絡入れておきます」

ここで初めて理解した。

私達は”置き去り”から”使い捨て”になったんだと。

13歳だった私はその日施設を飛び出した。

13という年齢になると比較的実験には参加させられない。

私は周りの子に比べ、実験回数は少なかった。

幼い頃の脳の方が開発しやすいという理由らしい。

しかしそれでも私は能力を発現した。

その惨めな研究で得た能力を使い、私は研究施設を逃げ出した。

部屋の扉を窒素で覆った拳で破壊し、駆けだす。

けたたましく鳴る警報、追ってくる警備員。

攻撃を避け、時に反撃しながら私は必死に逃げた。

「ここから・・・追手の来ないところまで逃げなきゃ……」

他学区へ逃げる、それだけを考え人目のつかない路地裏を選んだ。

暗い路地、朝も夜も変わらないその環境に慣れ始めた頃、

「痛っ・・・」

三日も逃げ続け薬の投与が無い事で、蝕まれていた脳が薬を欲しが
る。

それは欲求だけに収まらず、”自分だけの現実”を乱し能力を暴走
させる。

それが痛みになって私を襲い、さらに”自分だけの現実”を乱し暴
走させ、

血を吐き、涙を流しながら、力無く路地に倒れこむ。

Act・26（後書き）

今回書いた話は、チャイルドエラー”置き去り”は”実験道具”だという事。
原作ではこんな書き方をしてはいないでしょうが、自分はそう捕え
ました。

”学園都市の闇”というのは、”子供をモルモット実験鼠にする”ということ
なんじゃないかなと。

そしてそこに最愛がいたので、自分なりの解釈を書いてみました。

前話といいこの話といい、浮ついた話が全くないですが、どうして
最愛と出会ったのか、それをしっかりと明記する必要があるかなと
思ってたんです。

だからこそ、暗くても残酷でも、書くべき事は書くと。
暗い事があつての、今の当麻と最愛だと思つんです。

A c t ・ 2 7 (前書き)

途中で目線が変わります。

はずだった。

「おい、大丈夫か？」

力無く倒れこむはずの私の体は、一人の胸へと収まる。

「……」

「大丈夫…：じゃなさそうだな」

「うっ…うっん」

私は久々に睡眠を取った。

それでも周囲の警戒もあつてかそれほど寝れなかったのだが。

「おっ、目を覚ましたな」

と、黒髪ツンツンの男が私の顔を覗き込んでいる。

どうやら膝枕されていたようだ。

最初は誰かと驚いたが、

起きて話を聞いてみれば私が倒れかかった人だったようだ。

男の話だと、肌は汚れ、服はボロボロ、髪はボサボサ、そして至る所にある怪我と血という異様な格好だった私に倒れ掛られたので、とりあえず寝かせられる場所をと公園のベンチに運んできたのだという。

そう言われて自分の身体を見てみると、怪我をした部分には白い布が、そして肩から腰にかけて私には大きすぎる程の学ランが掛けられていた。

<当麻side>

「うっ…うっん」

彼女は、俺が寝かせた公園のベンチから上体を上げる。

「おっ、目を覚ましたな」

「…」

「急に倒れ掛られたもんで、なんか訳があるんだろうと思って、ここまで運ばせてもらったよ」

「すみません…」

「怪我もしてたみたいだし、服とかボロボロだったから、手当てをさせてもらったけど…迷惑だったかな？」

「いいえ、ありがとございます…」

ぐううー

どうやら彼女は空腹のようで、それを示すようにお腹の虫が鳴く。

「…これ飲むか？…えーっとヤシの実サイダー」

「はい…いただきます」

「じゃあちよつと待っててな、そこで食いもん買ってくるから」

俺は彼女の好みを知らないので、適当に周辺の屋台からたこ焼きと焼きそばを買ってくる。

幸い、この時期は色々な場所で小規模な祭りをやっていた為、食べ物に困らない。

「はい、たこ焼きと焼きそば。これ食ってまずは腹満たせ」

そう渡すや否や…というか半分奪われ気味なその二つを、彼女はも

のの見事に完食した。

「ごちそうさまでした」

「いえいえ」

あつ…と声を出し彼女は下を俯く。

「お恥ずかしい所を…。ここ数日…何も飲まず何も食べれなかったので…つい」

正直身形を見ても、というか雰囲氣的に追われ疲れている感じではあった。

それを見越して彼女が目を覚ます前に、すぐ近くの自販機でジュースを買っておいた。

少し行けば屋台があったのだが、追われている所を見て、寝ている彼女を放置するのは危険だと判断した。

「事情は深く聞かない。けど、君は追われてるんだろ？」
「えっ？」

A c t ・ 2 8 (前書き)

毎日、短編とは言え更新しているとストックが：

というよりも今本編よりも番外編の方が筆進んでるっていう。

とはいえまだ十分にストックはありますが。

番外編は、100000アクセスになるか150000ユニークに達したら更新します。

<最愛side>

「事情は深く聞かない。けど、君は追われているんだろ？」

「えっ？」

どうして分かったのだろうか…ってああ、こんな格好してれば想像はつきますよね。

「厄介事には慣れてるからね」

そういう彼はいかにも優しそうで、助けってくれそうだったが故に、その彼を巻き込む訳には行かなくて…

「あ、あの…」

「ん？」

「もう迷惑かけられないんで、これで失礼します。ごちそうさまでしたっ」

「あちよつと…!!」

その彼の言葉を聞かず、私は大きく踏み出した。

迷惑がかかる。迷惑はかけずにここから離れよう。

そうしてある程度彼から離れた時、私をまた能力の暴走が襲つ。

しかも今回は程度が違う。窒素が私と酸素の間に”完全に”膜を張った。

「あっ……がっ……」

一気に得られる酸素が薄れる。脳の機能が低下する。息が出来ない。

「……っ……はっ……」

体に酸素が入らない。目が見えない。耳鳴りがする。抗い様の無い暴走に抵抗出来ず、アスファルトへと沈む。

<当麻 side >

「もう迷惑をかけられないんで、これで失礼します。ごちそうさまでした」

そう言うと彼女は走っていき、俺を物凄い速さで離していく。これ以上無理をすると彼女に何が起こるか分からない。それは直感。

今助けないと大変な事になると頭が判断している。

「くそっ」

俺は彼女が行った方向に走り出した。

しかし、

彼女はいきなり苦しみ始めたかと思うと、走るその体勢を大きく崩しそのまま倒れる。

ゴンという、聞くに堪えない音が聞こえた。

<最愛side>

病院

心音を表す無機質な機械音。

薬品の臭いのする病室。

ここまでは私の最も嫌うシチュエーション。

しかし、今日の目覚めでは違う事がいくつかある。

朝日の射し込む窓。

フカフカできちんと整えられたベッド。

そして…

昨日あの時助けてくれた少年の寝顔があった。

「良く眠れたかね？」

医者が病室の入り口でカルテを見ながら私に聞いてくる。

「え、ええ」

「夕方いきなりだよ、私は今日非番だったのに引つ張り出されたんだから」

「すいません」

「いや、君に言ったんじゃなくてそこに寝てるツンツン君だよ」
「…」

そう言われる彼はスースー気持ちよさそうに寝ている。

「いつもは自分がそのベットで寝てるってのにねえ」

なんでも彼は毎月数回この病室に運ばれる事があるらしく、その度にこの医者が執刀してるのだという。

「そういえば何で私がここに？」

「そのこの彼が必死の形相で君を運んできたんだよ。あ、そうそう、これから朝食だからね」

カルテをパタパタと振りながら去っていく医者。

「この人が…必死に…」

A c t ・ 2 8 (後書き)

この話では二人の視点がドンドン変わりましたが、緊迫感みたいなものを表現したかったからです。片方の心情だけだと駄目で、だから書くともっと駄目だと思ったので、各視点を短めに、継続的に書かせて頂きました。

これからまた明るい話になっていきますのでw

やはり読者のみなさんとしては明るい話の方が好きなんじゃないかな？

ぜひその辺をお聞きしてみたいのですが…。

まあどっちにしる地の文は下手くそなので、好きとか無いかもしれませんがw

Act. 29 (前書き)

ここからいつものように第三者の視点で。

「ん…なんか良い香りが…って!!」

目覚めは味噌と焼き魚、炊きたての米という、垂涎必須の匂い達。実は当麻、昨日の朝以降、食事という食事を取っていない。ナケナシの金是最愛に奢ってしまった為に無いし、その後最愛をここに運んでからもずっと様子を窺っていた為、飲み物も食べ物も、何も口にしていない。

そんな当麻に襲う空腹と睡魔、何より目の前の暖かそうなベッドの誘惑に負け、当麻は最愛の邪魔にならないような位置に顔を伏せて寝ていた。

「腹減ったあゝ!!」

ガバツと顔を上げるとそこには…

「やっぱりお米にお味噌汁に焼き鮭は超美味しいです」

美味しそうに病院の朝食を頬張っている最愛がいた。

「あ…あのぉ…」

「あ、起きましたか？朝食頂いちゃってますよ」

そついう最愛の手元を見るが、食事が一人分足りない。

「俺…のは…？」

「貴方は病人じゃないでしょう。何平然と貰えると思ってるんですか」

「えーもう財布にはお金入って無いですよ…外食しろと!？」

いやいや知らないし!と言いたげな顔で、

「だらしの無い生活送ってるからじゃないんですか？」

と、最愛は的確に当麻の心を抉る。

「…まあ否定は出来ませんが…」

「じゃあ超自業自得じゃないですか!」

とはいえ空腹から来るサイレンはけたたましく鳴っている。

「いいなあ…お腹減ったなあ…」

ぐうぐうと空腹のサインを発しながら、食べ物を欲す当麻。それを見ていて、流石に可哀想だと思ったのか、最愛は箸をトレーに置き、少し食事を見つめた後、

「じゃ…じゃあ、少しだけ分けてあげます。今小皿をもらって…」

これが失敗せうじゆうだったと、少女は後々語る事になる。

「本当か！ありがとうー！」

そついうと当麻は最後まで話を聞かずに料理を食べ始めた。

”最愛の使っていた箸”で。

「な！ちよつとそれ私の使ったヤツですよ！」

という悲鳴も聞かず、

「うんめえー、マトモなの食ったの久しぶりだー」

と呑気な事を抜かして食べている当麻。

その光景を見てふと最愛が、

「ま…まあ…おいし…無理に止める必要性は超無い
ですよね…」

いつものトーンとは違う声色で呟いていたのは誰も分からない。

A c t ・ 2 9 (後書き)

いちゃいちゃ開始です。まだローギアなのでこれからどんどん上げていきたいと思ってます。

この二人だけにすると、やけにコントというか漫才みたいに書いてしまうんですね。でもその方が本人達の楽しさが伝わるかな〜と思っていたり。

A c t ・ 3 0 (前書き)

今まで言えてませんでした、

感想をくれた方々、本当にありがとうございます。

皆様のお陰で30話まで書けました。

平に平に感謝致します。

それが励みになり筆を進める原動力になります！

読者あつての上条with最愛です。

「まあ、食べていいと言いました」

両腕を組み、物凄い笑みで仁王立ちしている少女、絹旗最愛。

「…はい…」

それを、冷たい病室の床に正座して俯き聞く少年、上条当麻。
見た目などを

考慮すれば、当麻が年上なのは明白なのだが、
これではどちらが年上なのか分からない。

「そう言ったのは私が、”私の食事”を分けてあげようという慈
愛の精神からです」

「…存じております…」

「そのナイチンゲールばりの超素晴らしい気遣いに対して貴方は
どうしましたか？」

それはそれは、今誰が見ても聖母のような笑みを見せる最愛。

だが…

「……………完食してしまいました」

という答えを受けて、少しずつ表情が変わってくる。

「おかしいですね、何故”少し分けてあげる”と言ったのに”全部食べさせてあげる”になっているんでしょうか？」

「ここ最近モヤシと卵しか食べてなかったの、つい…」

最愛と出会う一週間前から、

例のデルタフォースのバカ共と遊んだお陰で、

紙の金は尽き、硬貨でのみの生活を送っていた。

そんなこんなで最愛に出会い、話題の無意識の親切心発動で金は潰える。

そんな大変な時に、

目の前の女の子が『食事分けましょうか』なんて言ってきたので、

『もう一生ついていきますぜ、アネゴ！』と心で感謝しながら食いついた。

結果こうなった。

「つい、で貴方はナイチンゲールの慈愛を全て食らい尽くすんですかっ!？」

「ナイチンゲールは怒りません…慈愛の精神で是非お助けください」

「超我慢なりません、折角まともなご飯を食べれたと思ったのにっ!…!…!」

「…お顔が怖いです…」

「そうなるような状況にしたのは誰ですか!…」

「俺…でしょうか、ごめんなさい…」

ブチッとまたもや大切な何かがキレる音が…

「一発殴つていいですか、いいですよ、寧ろ殴ります!」
「三段活用使えてないですし、ナイチンゲール様…」

「またもやイラッと、そして最愛の根幹が全てキレた。」

「歯を食いしばってください。食べ物の怨みをお教えます」
「ちよっと今殴られたらさっき食べたのが出て…」

ドゴツと、最愛の窒素の力が乗った拳が当麻の鳩尾にクリーンヒットする。

「ぐはっ…」

Act・30(後書き)

自分にとって今までで一番の脳内再生率です。

やっぱりじつじつ明るくないと駄目なような気がしますね。

A c t . 3 1 (前書き)

単発ですが。

「少し強く殴りすぎたみたいで、ごめんなさい…」

最愛はベッドに横になる当麻に話しかける。

自分がした事で立場の入れ替わった事に反省しているようだ。
ちなみに最愛は今のところ順調なので、病室から出て来ても良い事になっている。

「なんだこの立場逆転…とほほ」

「でも貴方だって悪かったんですからね」

「それは猛省している所存でございます」

などと話している最中に夜食が運ばれる。

「あれ、食べた分くないんですか？」

「は？」

「貴方、私の食事の半分以上以上食べましたよね？」

「とはいえ君、さつき看護婦さんに頼んでもう一食食べたよね？」

「…私だって…」

「ん？」

「わ…私だって差し上げたんですから、今度は私にくれるのがスジなんじゃないんですか!？」

「スジって…そんな極道さんのような言葉づかいは関心しないぞ…」

「もういいです、くれないなら奪い取ります!」

「その底なしの食欲は一体何なん…っておいこら、待て待て待て待て!」

最愛は当麻に襲いかかる、というよりも弁当のみをターゲットに突っ込んでくる。

「寄こしなさい、意地汚いですよ!」

「それは君の方だろ!」

「いいから……私に寄こしなさい!」

「あれ、なんかキャラ変わってるからね、君」

食器が乗ったトレイを引つ張り合う二人。

がちがちと音が鳴り、汁物や副菜が皿からこぼれそうになる。

結末は目に見えているだろう。

最愛の体調はまだ優れていない。

大騒ぎするとまだ脳が痛む。

「痛っ」

最愛は突如として襲う頭痛に力を緩める。

それに対して、割と大人げなく引つ張っていた当麻は勢いよく後ろに倒れた。

A c t . 3 1 (後書き)

「割と大人げなく」というところがポイントですw

A c t ・ 3 2 (前書き)

この作品のサブヒロイン、看護婦さん登場 W

「上条さん、体温計りにきました…よ…」

看護婦、その仕事は患者の退院までサポートする事。

処置を施し、手術を手伝い、心身共々健康にする、それが仕事。

今までがそうだったし、これからもそうだ。

それは例外は無く、それこそ看護婦としての役割であるからだ。

だがどうだろう。

看護婦は仕事の一環（半分以上が私欲の一環）でこの病室に入った。
体温計などが入ったワゴンを押しながら、仕事（私欲）をする為に
来た。

なのに…

なのに何故…

患者同士がベッドの上で接吻なるものをしてるんだろうか。

ここは病院ではないのか、という意見よりも、

まさかここで盗られる！？と真っ先に出たのは恋する乙女だったからなのだろうか。

そういえばつい先日見たドラマにこんなシーンがあった。

患者と看護婦との禁断の愛。

どちらから求める訳でもなく、しかし自然と触れ合う手。

そしてそれを病室の影からハンカチを噛んで悔しがっている患者の義妹…。

しかし、どうだ、今のこの状況…。

まさしくその逆じゃないか！！と思ひ、ハンカチを噛む看護婦。

とにかく、いの一番に言いたい事は…

「上条さんの裏切り者おおお！」

A c t ・ 3 2 (後書き)

まさかの看護婦だけの話 W

この看護婦、昔から当麻に――目惚れ(カミヤん病)な設定です。

まあ今でも相変わらず当麻を狙っていますが W W

看護婦が病室に入ってきたことも、叫んで出て行った事も、夕飯を食べそこなったりとか、洗濯物出しっぱなしだとか、明日以降の食事だったり、出された課題はどうしようとか、

そんな事は全く頭に無く

自分の目の前にある、視界いっぱいの子の顔

それだけが何故か、思考の全てを支配していた

人は不慮の出来事に見舞われると、思考も行動も全てが停止する。今何をしているのか、どうしてこうなっているのか。

考えが及ぶ前に、視覚から得られる情報のインパクトが多すぎて処理が追いつかない。

「（私のファーストキスが…）」

と思う反面、この人でよかったなとも思う最愛。

なんかもう良く分からないけど、この暖かい気持ちは何故か嬉しく
て…

最愛は泣きだしていた。

「うえええん……ひっ……ぐすっ」

キスをした状態で。

当麻からしてみたら毎度の不幸で目の前の女の子を巻き込み、
拳句にこんな得体の知れない男とキスまでさせてしまった。

その後泣かれたのだから、

これはいよいよ最高級の土下座をしなければ死刑だと思った。

しかし、この状況（密着状態）で泣かれてしまうと、
喋る事も出来なければ身を翻す訳にも行かない。

そうしてこの体勢のまま10分が経過した。

「……………」

「……あ…あの～あれは偶然的な出来事でございまして…」

当麻のベットの近くにある来客用の椅子に座っている最愛は、顔をこれでもかと真っ赤にして俯いている。

そして最愛に対してあれは事故だったと必死に説明する当麻。

当麻は”社会的抹殺が下されるかもしれない危機的状況”に対し、最愛側はもう”好意ある人間にファーストキスを搔つ攫われた嬉々的狀況”である。

「……………」

「（無言がこうも精神を啄ばむとは…謝っても何も反応してくれないし…）」

先ほどまでの、聖母様のクダリでの盛り上がりようは何処に行ったのだろうか。

最愛は借りてきた猫のように静かにし、当麻も当麻でどうしたらいいのか分からず黙りこむ。

ただ、二人の脳内では密着状態の記憶が所狭しと飛び交っているのだが。

「なんだい、病室静かだから脱走したと思ったよ」

そう言って入ってくる医者。

「む、どうしたんだい二人共、静かになって珍しい」

やはりこの状況が気になり説明を求めようとしたのだが、そこはやはり大人、察した。

「なるほど、まさか病院でやっちゃった？」

「ちよ、そんな事はしてないですよ！！」

「あれおかしいな、別に何をやっちゃったかなんて言っていないの”そんな事は”っていうあたり、何かしたのかね？」

そう言われて聞いてた当事者達はさらに顔を真っ赤にする。

「ま、私は患者の求めるものを提供する医者だからね、私が邪魔なようなので失礼するよ」

出て行って欲しかったような、この空気をどうにかして欲しかったような、

そんな二人の意思もこの医師には届かないのか。

患者がそれを欲しているというのに…逃げたな…あの医者！と思う二人。

それから二人は徐々に話始めるようになり、

当麻が、今だに入院している最愛の御見舞に行ったりとしているうちにもっと仲が深まった。

A c t ・ 3 4 (前書き)

まだ過去の話、続いていますよ

学校の休み時間

とある高校、一年の教室の一角。
次の授業の宿題をやっていないので必死にやっている当麻に話掛ける
声。

「なあカミヤん……」

「お、どうした土御門」

金髪で長身、制服の下にアロハシャツを着るいかにもな友人、土御門元春。

「もしかしてお前……最近年下の女の子と会ってね だらうな」

「お、なんで知ってるんだ？」

「あまつさえ、その子は中学生とかいう……」

「おお、お前の情報収集能力が恐ろしい……」

「デルタフォースの掟忘れてね だらうな……」

デルタフォースとは、このクラスの三バカで構成される組織。
時にクラス全体を盛り上げ、時に女子（吹寄）から蔑まされる。

「いつもの猫口調は何処行っただらうな」

「言ってみろ！」

「なんか怖いぞ……」
「いいから言うんや!」

そついうのは青髪ピアス。

青髪でピアス、長身大柄という凄い見た目とは裏腹に、内容とか性格、好みなど全てがちやらんぼらんしてるような男。

「んだよ、青ピまで……言えばいいんだろ? “女の子と親密な関係になつたら反逆罪とみなし、背中から刃を突き刺す” “モテる事これ即ち死あるのみ” だろ? 俺が女の子と親密な関係になつた事なんて無いし、モテた事なんて生前から今までそして金輪際ありませんですよ。何を言っておられるのか」

「青ピ、聞いたか? コイツ言い放ちやがった……」

「おう、聞いたとつたでー」

「カミヤん、歯あ食いしばれ!!」

「なんでだよ、ふざけんなああ!!」

そついう当麻の携帯に、一通のメールが来た。

メール受信：絹旗最愛

A c t ・ 3 4 (後書き)

最近、一話一話短くなって…。
ごめんなさい

病院

メールが送られている事に気づき、放課後に病院に寄る当麻。送られてなくても嫌がられても行くのが当麻なのだ。

「上条…ねー、上条」

「なんだ絹旗、上条を連呼するな」

この日もそれまでのように最愛が当麻と話し始めるのだが、何か声色が違う。

いつもより高い声で、

「わ、私明日退院するんですが」

「そうなのか、良かったな。もう大分良くなってるんだろ？」

「それは上条のおかげなんですけどね」

「いやいや、絹旗が大人しくしてたからじゃないのか？」

「誰のせいだと思ってるんですか」

キス以降、妙に当麻を意識して暴力的な事は出来なかったのを、当麻的には”大人しく”になるんだろう。

「俺？な訳無いよな！」

「わかりました、殴って欲しいようです」

拳にむかってハァーと息を吹きかける最愛。

「あれ、大人しく無い!?」
「私まだ小6ですからね、大人な訳無いじゃないですか!」
「なんか意味合いが違うぞ」
「なんか久々に拳が…能力が疼きます。あー超発散したいです」
「俺はサンドバツクかなんかですか!？」
「さしづめ、パンチングボールなんじゃないんですか?」
「俺はそこまで丸く無いし赤く無い。だったらあの時の絹旗の方が似てるだろ!」

今のこの状況は誰が見ても仲良し兄妹。それくらいに空気に違和感がない。

「ほう、私がなんですって?」

「墓穴掘った!？」

「次は上条が入院する番みたいですね、何年が良いですか?あ、何世紀が良いですか?」

「それは俺が絹旗さんからストレス発散で殴られた揚句、そのダメージから長期入院を迫られるというパターンか!というかなんだ、何世紀って…!上条さんはもう退院したら御爺さんですからね!」
「もういいんじゃないですか、もうこれ以上女の子を好きにさせませんし」

「は?」

「あ…」

ポロリと出た本音。

「いや、これはですね、あの、その、えつと…」

「そこまでして絹旗さんは俺に孤独死を望むと!?どんだけ俺を嫌ってるかが心から滲み出てねーか?」

「いえ、寧ろ好k…」

と言つてふと止める。あれ、これから先言おうとしてる事はもしかして…。

「す？」

「いえ、超何でもないですから！上条のばか！！」

「物理暴力から精神暴力に！？」

「それで、なんか言いたい事あるんじゃない？ メールに書いてあつただろ？」

「超すっかり忘れてました。これもバ上条のせいですけどね」

「俺の名字が…」

「ほら、明日退院するじゃないですか。それでお願いがあるんですけど…」

「おう、なんだ、言ってみ。出来る事なら何だつてしてやりますよ」

「上条の家に泊めてくれないですかね」

「いきなり話がぶつ飛んだな」

「そうでもないんですよ、私施設から飛び出しちゃって身を寄せるところが超無いんですよ」

「そっか…」

「とはいえお金も今無いですし、服も食糧も何もかも無いんです。せめて寝泊まり出来る場所ぐらいは確保したいんですけど…」

「一つ屋根の下に女の子と同棲って言うのは色々リスクいんですけど…」

そう聞くや否や、最愛は目の端に涙を貯め、

「そうですね、じゃあ私はここを退院したら路地裏で寝泊まりして、拳句にはスキルアウトに良い様に弄ばれて…ああ哀相に絹旗最愛、小学生なのに…」

うつつ…と泣いている最愛を尻目に知らんぷりという訳にも行かない紳士当麻は、

「あー分かった、その代わりにちゃんと金貯まったら出て行くんだぞ」

「ありがとう、バ上条…」

「おい、そこはせめて慕えよ…」

「慕え…ですか。じゃあ分かりました。当麻、なんて呼び方がいいかでしょう?」

はあとため息をつく当麻。

「俺は年上だぞ」

「じゃあお兄ちゃん」

「おい、土御門に云々言えなくなるだろ」

「じゃあ超決定で。よろしくお願ひします、お兄ちゃん」

「おい!」

A c t ・ 3 5 (後書き)

これで過去の話は終了です。

A c t ・ 3 6 (前書き)

過去ではなく現在に話は戻ってきました。

この話は予約掲載で更新しているのですが、この日まで実家に帰ってのんびりしてたので書き溜めの方が疎かになった結果、書き溜めに追い付きそうなので毎日更新をやめます。
またある程度書き溜めが補充されたら毎日更新にしますが、それまでは二日に一話更新させて頂きます。ご了承ください

「お兄ちゃん…」

「ん？」

病室の入り口から聞こえる声に振り向く。

そこには、淡い月の光を浴びて煌びやかに灯る、白が基調で青い水玉柄の浴衣を着る最愛がいた。

「どう…ですか？」

凄く恥ずかしいのか自信が無いのか、下を向き、手をもじもじしている最愛。

ただ当麻としては、

なんかもう色々重なり、

いや、もともと可愛いんだけど

「スッゲー似合ってる」

「こ…子供っぽくないですか？」

「まあ、最愛は少し子供っぽいトコあるからな、今さら変わんねえよ」

「むう…そこは普通子供っぽく無いよっていつのが…」

「冗談だよ、冗談。綺麗だよ」

「…っ」

「あれ、最愛？」
「ほ、ほ、ほ、本当に、き、き、き、綺麗ですか？」
「自信持てよ。大丈夫、綺麗だよ」
「……っ！」

様々な葛藤に耐えきれなくなった最愛は当麻にガバツと抱きつく。

「だー、ちよつと最愛？ 何を抱きついて…」
「怖かったんです、もし…変って言われたら…」
「なーにを言ってるのかねえ、最愛が着て似合わないのはいないよ」
「ありがとう、お兄ちゃん」

そんな光景を慎ましく遠くから見守る刀夜と詩菜。

「なんだ母さん、最愛ちゃんの浴衣を着付けてたのか」
「ええ、これを着て当麻さんにアピールしたかったんですって」
「最愛ちゃんもまだ分かって無いねえ」
「そうですね。当麻さんは最愛さんにメロメロなのに…」
「まあ、我が子達を見てるのも良いけど、明日は朝早い。そろそろ帰らなきゃ」
「そうですね、では御暇しましょうか」
「ということ、最愛ちゃん、これからも仲良くな」
「最愛さん、頑張ってくださいね」
「はっ…はいっ！」

それと…と両親は当麻を見て、

「じゃあな当麻、あんまり羽目外すなよ」

「当麻さん、もしもの事があつたらちやんと責任はとるんですよ」

「……」

「もう……お父様もお母様も……／＼／」

「おい……おい！」

鈍感な当麻でも流石に今の会話が何を指しているのか分かってしまい後悔した。

親が帰ってから数分後。

「あれ、まだ着物着てるけど……」

「大丈夫です。お母様に着方も脱ぎ方も教わりましたから」

「いやいやそうじゃなくて……着物着たまま寝るわけ？」

「お兄ちゃんがそうして欲しいって超懇願するならそうしますけど？」

「超却下」

「え〜」

頬をぶくーっと膨らます最愛。

どうにもそれを自ら願っているのだが、当麻には届かない。

「あのな、ここで皺くちやにしたら彩月花祭に何着て行くんだ？」

「う……そうですね、じゃあ着替えます」

そう言ったものの、一向に部屋から出て行くつもりがない最愛。

「…部屋変えろよ」

「え〜」

「え〜じゃない。なんだ、言わなかったらここで着替えてたの？」

「はい」

「じゃあ…」

……

……

……

…

「寝巻に着替えたな？」

「はい、ばっちりです」

最愛のパジャマ（ネグリジエ）は、学園都市外製品。

中肉素材の為一年中使用できる優れもので、

全体的な配色チャコールグレー、

裾には白であしらったハートのチエーン模様があり、

それと同色のボタンがついて可愛いＴタイプのネグリジエ。

他にもいくつか候補があったのだが、最愛はこれだと揺らぐ購入理由はもちろん当麻を誘惑したいからなのだが、

当麻は風呂場に籠って就寝という暴挙に出たのでそれほど意味が無い。

「よし、んじゃ寝るか」
「りょーかいです」

ちなみに最愛が寮のベッドで寝る際は、一人分の空白の確保と枕が二個常備されている。

いつでも一緒に寝ますよ、という意思表示をしている（口でも言っている）のだが、当麻は頑なに拒む。

と当麻は寮では強気なのだが、病院に入院する事態になると流石に最愛を寮に一人で居させたくないのか”一緒にベッド”で寝る。

結局は当麻は最愛に超甘いのだ。

ちなみに。

当麻曰く『睡眠だけでも贅沢にしてやらなきゃ』という志の下、最愛に寮のベッドの提供、質のいい布団・パジャマのプレゼントをしたのだが、

土御門舞夏を始め、この事実を知っている者曰く、

『本人は気付いてないけど相当な無自覚なシスコン（しかも重度）と有名。』

「んじゃ、電気消すからな」
「はい」

こうして夜は明けていった。

Παπα...

Act・36（後書き）

パジャマの説明は、いわゆる一緒に寝る云々の話を引っ張るキッカケ：だったのですがあまりにも力説してしまいましたw
すいません、説明文はセシルから貰いました。
けど最愛が着ているのはセシル製ではないですw

まあ私服がニットのワンピースなら、寝巻もそんなタイプかなとか思ったりしたんですけど。すいませんw

次から新章です。

・木曜日

「上条さん、朝ですよ」

この声で一日が始まるなあ〜なんて思いながら体を起こす当麻。

「ふあああーっ。んー駄目だ、そんなに寝れてないな〜」

何故寝不足時と寝すぎた時はこう…地味に首が痛いのだろうか。思ったところで答えは自分でしか返せないのだが。

「ま…またですか上条さん！そろそろいい加減にしてください！
！」

覚ましたての目には辛い真っ白のナース服を着た看護婦は怒りながら病室を後にする。
なんだ？と思っっていると…

「にやあ〜っ…おはようございます、にやああ…」

小さな手で目をゴシゴシしながら起きる小さな女の子。

「うお、朝日が目に染みるぜい、ってミサカはミサカは朝日を浴びることで体内時計がリセットされるっていう人体の神秘に驚いて

みたり！」

小さい手を天に差し出し、背中を伸ばしながら起きる女の子。

「ふあっ……。もう……。なんで静かに起こしてくれないんですか」

小さく欠伸をしながらいつものように起きる最愛。

この三人が”同じベッド”の”上条のすぐ隣”で目を覚ました。

当麻は感じ取った。駄目だ、この光景は駄目だ……。っていうかこれが、怒ってた理由は……。！と。

起きた矢先から不幸の針が振り切る当麻の不幸メーター。

しかしこれを不幸と言ってしまふ当麻の考え方こそが不幸なのではないか？

ただまあ一つ言える事は、

「看護婦さん、誤解です……」

A c t ・ 3 7 (後 書 き)

キリ的な関係で今回は短編です。

Act・38（前書き）

前話、その少し前にフレメア普通に出しましたが、アニメから参加の人は分からないですね。

ここで少し説明を。

一方通行が路地裏で大柄の男、駒場利徳を倒しましたよね？

その駒場が持っていた携帯の待ち受けにいた女の子がフレメアです。はたして声優は誰なんでしょうか、凄く気になりますw

多分劇場版で出て来るのだと思いますが。

しかし、原作の挿絵のフレメアとアニメのフレメアの差が激しい気がしてならない…くそ、そこは統一しろよ！

このSSだと新訳一巻の表紙のフレメアが一番しっくりだったり。

ナケナシの当麻の財布（当麻の奨学金のあまり）から出した食事が三つ少女らの前に並ぶ。

先日のように『歩けるだろ！』と言いたかったが、如何せん色々聞きたい事もあったので仕様が無く自腹だ。

あの騒動以降、お金を払うと病院食を貰える。

というよりも看護婦が気を利かせて作っておいてくれるらしい。当麻は善意だと思っているが、それには他意があるのだろう。

「上条のお兄ちゃん、ありがとう」

目を輝かせながらお礼を言って来るフレミア。

「やっぱり朝は白いお米と味噌汁、塩分控えめの鮭に納豆だね」
「！」

質素な朝食ながら日本気質溢れる和食に喜ぶ打ち止め。ラストオーダー

「ごう…空腹の時の味噌汁の香りは何でこつも超刺激的なのでしようか…」

何回目かのこの食事にも全く飽きもせずに刺激される最愛。

「お、苦手なグリーンピースが無い、にゃあ」

「ごう…日本の質素な食事が、いいスタイルを生むのだよ、って乙女なりの知識を披露してみる」

「鮭ですか、これを見てたら麦野を超思い出しますね」

まあでも、

ひまわり
笑顔が三つ咲いていれば、お金を出してもいいかなどか思ってる当
麻だったり。

「デザートはプリンだあ〜」

「お〜、乙女心を十分に分かってるねえ」

「でもこれを食べることでまた少し体重が増えてしまっんではな
いでしょうか…」

プリン一つで話に花が咲くのが、女の子の特権であり…

「だったら最愛のお姉ちゃんには私にプリンをちょうだい。にゃあ」

「ミサ力達くらいの年齢なら、まだ体型とか気にしなくてもいい
し」

「なっ…私は別にプリン要らないなんて言ってません。というか
むしろ年長者に超献上すべきです…!」

ープリン（甘い物）ー一つで場が荒れるのも、女の子の特権である。

A c t ・ 3 8 (後書き)

たけんちゅ解釈のフレミアの口癖は「く、にゃあ」です。

そもそも原作の「大体」ってギャル風で可愛くないじゃないですかw

15時頃

「ううう、ベットで遊んでるのもそろそろ飽きたかも」

両手両足をバタバタとさせて暇さをアピールする打ち止め。

「トランプも終わっちゃったし、本も漫画も雑誌も全部読んじゃった、じゃあ」

読んだ本をきつちりと元の場所に戻しながら話すフレミア。

「今、他の人居なくてよかったですね、私達どれだけぐうたらしてるかって見られずに済んで」

最初から最後まで終始ゴロゴロしてた最愛。
「とうか見られないで良かったのは最愛だけだろう。」

「うん、俺はともかくお若いお嬢さん方がベットでゴロゴロしてるのは教育上宜しく無いと思う」

そんな打ち止めのバタバタ攻撃、フレミアの八キ八キ態度、最愛のゴロゴロ無気力に挟まれながら頭の後ろをポリポリ掻きながら言う当麻。

「教育上って…すっかり上条さんはパパな気分？」

「上条のお兄ちゃんから上条のお父さんになっちゃった、にゃあ」

「こ…この中だったら私がお…お…お母さんですかね…」

「最愛ママに上条パパだ…って、ミサカには居ないパパとママはこんな人達だったら面白いなって想像してみたり」

「私もお父さんとお母さんの記憶がそんなに無いから、ちょっと嬉しいかも、にゃあ」

「もし、妹とか娘とか私の周りに家庭が出来たらこんな気持ちになるんでしょかね」

その三人の言葉を聞いて俺はそういえばと思った。

打ち止めはクローンで、両親と一緒に暮らしていない。

フレミアも生まれて間もなく姉のフレндаとこの街に来たらしく、親を殆ど知らない。

最愛は”置き去り”の為、両親を良く思っていない、一人っ子だった為に姉妹も居ない。

この三人の小さい女の子達はしつかりとした家族を知らないのだ。

家庭という、俺にとっては普通だった景色を知らない。

それでも、闇を照らす程の眩しい笑顔を持つ彼女達はその生活に慣れているんだろう。

でもその裏に見え隠れする”家族と一緒に居たい”という気持ちがあるのを俺は短い関わりで感じた。

「あつ」

「？」

「これから少し散歩しようか」

A c t ・ 3 9 (後 書 き)

感想及びお気に入り登録、ありがとうございます。
それを励みに頑張って行きたいと思えます。
どうか完結まで見守ってください。

A c t ・ 4 0 (前書き)

このA c tの内容、何故こんな方向に走ったのか自分にも分からな
いです。

<ここから重要 >

これから大学で中間テストがあります。

テスト勉強をという理由で本編が書けず、このまま更新をしていく
と書き貯めを全部消費してしまうと思います。

そうなるに次に書き貯まるまで更新を空ける事になると思うので、
その所を承知して頂きますようお願いします。

こちらの勝手な都合ですみません。

テストが終わったら終わったと、活動報告等に書きますので。

著者がリアル上条(頭の中身のみ)で申し訳ありません…w w

「いいなあ〜いいなあ〜」

「超うらやましいです、フレミア」

「ここは私の特等席。絶対譲らない、にゃあ」

右手で最愛、左手で打ち止めと手をつなぎ、そして肩車をするのがフレミア。

最初に誰が手をつなぐで揉め、じゃあ誰が右手をつなぐと大揉め。

流石に耐えきれなくなり、しょうが無いので一番軽そうなフレミアを肩に乗せる。

ただ、「何故フレミアなのか」という追求を二人から受け大変だったのだが。

「流石に最愛を肩に乗せるのは…ちょっと」

「お兄ちゃん、そういう事言いますか。覚悟は出来てますか…ってあー！」

よかった、こつこつ事態を予想して右手側にしておいてとつくづく思う当麻。

「お兄ちゃんじゃなくて”パパ”だよママ　って、ミサカはミサカは間違いを訂正してみたり」

「ちよ…超照れます」

今日は家族で近くの公園まで散歩（ただ他の三人いわくデート）という事になった。

もとより、この上条当麻という人間の根底には、困っている人には優しくという考え方が根付いている。

だからこそ、擬似的にでも一時的にでも”家族の暖かさ”を味わって欲しかった。

それに少しでも貢献できるのであればと上条当麻という人間は喜んで身を差し出す。

「あ、猫ちゃんだにゃあ」

植え込みからひよこつと顔を出した猫を指さす。

「ムムム、あれは10032号が飼っている猫！ってことはこの辺に10032号もとい邪魔者がっ！！」

「御坂の妹ですか…ちつ、何故このタイミングで！」

「邪魔者とはなんですか、とミサカは何自分達だけ面白そうな事してるんだと20001号の頭をペシペシ叩きます」

「痛い痛い」

「コラコラ御坂妹、暴力はしちやいけませんよ、暴力は」

「オイ、どの口がほざくんだコラ」

御坂妹の次に来たのは一方通行。

「あれ、一方通行じゃねえか。ていうかあれはお前がいけなかったろうよ」

「まア…それは否定できねエけど…」

「でもでも、それがなかったら今みたいな出会いは無かった訳で…」

「そうですね、と、あの時私達ミサカの前に現れた貴方の後ろ姿を思い出して懐かしみます」

「私も助けに言ったんですけどね！（私が手を出すまでも無かったですけど）」

各自、フレメアを除いて当時を思い出す。

もちろんフレメアは楽しくないので当麻の髪をびよこびよこ動かしていた。

「っていつか何でお前ら一緒なの？」

「はア？それは「いえいえ、こんな若白髪と好き好んで一緒にいませんと、凄い勢いで拒否します」」

「あア、てめエが上条を探せつって泣いて俺の所に来たから付いてきてやったんだろ」

そんな事があつたのね、とこの場にいるメンバーは思った。

病院の近くの公園のベンチに腰掛ける最愛とフレメアと御坂妹に今買ったジュースを渡す。

「「「ありがとうございます（、にゃあ）」」」

こくこくと、喉を鳴らしながら飲む三人を遠巻きに見る。なんか平和で良いな。

「あ、そうだ一方通行、ホレ」

ついでに買った缶コーヒーを投げる。

「すまねエ」

投げて渡した缶コーヒーを眺める一方通行。

じっと見ていたかと思うと、開けて飲み始める。

「まア、お前に愚痴なんか言いたかねエけどよ、家族ごっこも疲れんだろ」

最愛達には聞こえない程度の声量で話す一方通行。

「うん？そうでもないし、”ごっこ”って言い方もあれだな」

「ふーん。まア、お前の性格上そう言うと思ったけどな」

「お見通しってワケか。さっすが学園都市第一位様で」

プシュッとプルタブをあける。

「そういうお前はどつなんだ？」

「俺…ねエ…」

缶コーヒーを口から離し、空を見上げる一方通行。

「ほら黄泉川先生とか芳川さん…だっけ？一緒に住んでんだろ？」

「誤解無エように言っておくけど、無理矢理だからな」

そういう一方通行はいつもと違って…。

「はいはい、そういう事にしとくよ」

「チッ」

クイツと俺ら二人はコーヒを口に含む。

「そういえば、打ち止めもお前に結構懐いてるけどな」

「あのガキはただ俺で暇潰してるだけだ。それ言ったらお前の方が懐かれてるじゃねエか」

「俺ももしかしたら暇潰されてるだけかもしれない」

「なアンにも分かって無いのな、お前」

はあ、と大きいため息をついく一方通行。

「何だよ……」

「好意寄せてるってなんで分からねエかね。俺はただの罪人、お前はその救世主。身分が違う」

「おい、お前まだそんな事……」

「説教は耳が腐る程聞き飽きたよ。だがこれは事実だ」

「……」

「そう言うことだ。それに俺の病室にあのガキが来てもずっとお前の話題だ。それも聞き飽きた」

「ふうん」

「それと……」

それと……と注意しないと聞き取れないぐらいの声で言った後、

「あれからずっと、俺が妹達に話しかけてた事に感謝してんだよ。それも聞き飽きた」

A c t ・ 4 0 (後書き)

∴ 正直な話を申しますと、

本編の方が今スランプ気味だと言うのと、

番外編の筆が進みすぎる（しかも長編でいくつも）ので、

そろそろ2日づつも辛いかもと思ってました。

もちろんテスト勉強もあるのですが。

いい所に中間テストが来た∴と言う言い方は待ち望んでくださる読者に大変失礼だと思うんですが、勉強よりもこのSSを書いている時間が多いという事態は駄目だなと思っていたので自分としてはちよっぴり休憩、となります。

SS書いて単位取れれば話は別なんですけどねw

なので皆さんは、この中間テストのお陰で「たけんちゅが一旦テストに気持ちを切り替える事でさらに当麻と最愛がイチャイチャする内容（∴とその前にまずは本編の進行ですね）を思い付く」と思っ
ていてくだされば。

そして「辛い」と打とうとしているのに「最愛」と癖で何度も打つ
てしまっぐらいに慣れてしまっている自分の手を休ませたいと思
ってますw

いや、良い事なんですけどねww

A c t ・ 4 1 (前書き)

ここは多めにしています。

分けて書くと分かりづらくなるので一度にまとめて。

それと多分、この話は人によって好き嫌いが分かれると思います。

< 当麻 s i d e >

”絶対能力進化実験”を終わらせた後、俺は御坂と最愛に病院に運ばれた。

その際、他の妹達には一方通行を運ぶように言っておいた。そうしなければいけないと思ったからだ。

そして一週間程して互いに治療が終わり、病院の廊下ですれ違った時、俺は一方通行に謝られた。

『すまなかった』と。そして『ありがとう』と。

『お前が止めに来てくれなかったら、俺はこれ以上に妹達シスターズを殺した。』

最初は疑問に思ってた、何故俺がこんな事をしなくちゃいけないのかと。

周りはそれが正しいと主張し、俺自身誰も寄せ付けない力が欲しかった。

だから殺していいというムシの良い話じゃない事は重々承知していた。

だが俺との戦闘実験のみの知識を記憶された脳を持つ妹達は止まらなかった。

毎日何十人何百人と殺してきて感覚が麻痺していた時だった。猫を可愛がる妹達を見たのを。

そこで改めて気付いた。クローンにだって命や感情があるということ。

それから実験が始まる直前まで語りかけた、が妹達自身そうされる事を望んじやいねエ。

俺の言葉は通用しなかった。そんな時、お前が来てくれて助かった」

この言葉こそが一方通行から出てきた真実の言葉だという事も分かった。

そしてこの事実を御坂と御坂妹、最愛の前で話した。

「語りかけてきた事が本当でも、だからってあの子達を殺した事を許す事はできないじゃない」

腕を組み、静かに言葉にしていく御坂。

そこにどんな想いがあるのか、本人にしか分からないだろう。

「そうですね、学園都市全体はこの事件を表沙汰にしないように配慮してるみたいですが」

自分もこの実験では無いものの、”学園都市が行う実験”に関わった最愛は何かを探るように話す。

「だけど、あいつはこれからでも罪を償おうとしてる。それを応援してやってほしい」

無理を言っている事は分かる。

ムシがいいかもしれない…けど、一方通行も好きでやっていた訳じゃない。

それを分かってこの子達に理解して欲しかった。

「って言ってますが、御坂の妹はどうするんですか？」

「ビシツツと言ってやんなさい。アンタの思いを」

「私…ですか、私は…」

やや間があって…

「私は…いえ私達に話しかけてきた事は分かっていました。しかしそれは実験の妨げ又は無意味な事だと判断した上で断ってきました。そしてそれが無意味で無かった事を、私を直接動かしたのは…貴方です、とミサカは真っ直ぐ貴方の目を見て話します」

俺の目をまっすぐと見て来る御坂妹。

ふっつと軽く息継ぎをしてさらに告げる。

「だからこそ、私はもう私の物ではありません。貴方の物なんです、とミサカは冗談1割本気9割で話します」

「…それはアンタがこの事を…一方通行を許すって事？」

自然と御坂妹に向ける視線がキツくなる御坂。

「許すも何も、元から一方通行を怨んではいけません。むしろ上条さんに合う機会を運んでくれた白ずくめの恋の天使キョウゼツとでも比喻しましょうか、とミサカは巧い事言えたなと無い胸を張ります」

「悪かったわね、胸無くて！」

「御坂の妹、本当にそれでいいんですか？ 超後悔しませんか？」

「大丈夫です。それは妹達の総意です、とミサカは絶えずネットワークに入る嫉妬の言葉は隠してお伝えします」

「んゝまあ…アンタがそう言うならしょうがないけど……」

「ん？さっきの言い方が超引つかかるんですが…」

あれ？と首をかしげる最愛。

「フツ、今さら気付いたのですか？私が今立場的にも状況的にも一歩進んだのだという事を！」

ワーワーと騒ぎ出す三人。

それを見つつ、ゆっくりと部屋の壁に背を預け、その後ろに居るソイツに小さな声で話しかける。

「聞いてたか？」

「ああ」

「だってよ。女の子様は強いね」

「男より数倍強エよ」

「罪、償って行けるか」

「努力する」

「ま、そう肩に力入れるなよ。出来るもんも出来なくなっちまう」

「あア」

「俺も協力する。お前の友人としてな」

「…すまねエ」

< 一方通行 side >

「聞き飽きた…ねえ…。てことは逆を言えば、聞き飽きるほど一緒に居るって事じゃねえか」

こいつ、深く抉ってきやがる…。

「そうだなア、お前が病院に居ない時はもっぱら相手してるな。なんならお前一生病院居ろ」

ちなみに、こいつが言う御坂妹こと10032号含めた下位個体は俺の病室には来ない。

打ち止め曰く、『あの子達はいつもあの人を探しに言ってる』らしい。

お前は行かないのかと尋ねたところ、

『私は若さとお肌であの人をゲットして見せる、ってミサカはミサ

力はスペックが違うのだよ〜って決定的な差をここに提言してみたり。それに貴方がミサカ達に対して罪を償おうとしてるんだったら、誰か傍に居て学園都市第一位を顎で使ってみたいし〜、ってミサカはミサカは女王様になればこの気持ちをいつでも味わえるんじゃないの？って思ってみたり。でも…ミサカが貴方の所に来るのはそれだけじゃなくて、ミサカ達みたく危なっかしい所とか大人の勝手に動かされた境遇とか、そういう所を全部ひっくるめて”似てるから”。だから一緒に居るのかもしれない、ってミサカはミサカは要は同じ穴の貉なんだよ〜って言いたかったり』だそうだ。

こういう反吐が出るほど生温い光に似合わない俺、
幼い頃能力が暴走し友人を傷付けてから得た事の無い暖かさ。

それを何故大量殺人者の俺に向ける？

加害者である俺に、被害者と被害者の家族が。

今こいつらが俺に向ける感情は何なんだ…。

分からない。

今まで腐るほど浴びてきた殺意。

それとはまったく逆のベクトル。

俺にその矢印は動かせない。

“一方通行”と誰が言ったのか知らないが、強ち間違えていないのかも知れない。

こいつらの感情は常に俺に一方通行に向かってきやがる。

俺は決まりでも規則でも無い。

向こうから車が多く通るなら、そっち側からこっち側に一方通行。

こいつらが俺に暖かい感情を送り続けるのなら、それに従うしかない。

俺みぢが無くなるまで、こいつらおんくを通す。

向こうが必要無いと言つまで、この身を費やそう。

それが罪を償えなかったとしても、俺が消した笑顔が戻るのなら。

俺に似合わない事など重々承知だ。

「俺の奨学金的に一生病院に居続けるのは無理な話だからな」

「真面目に返すなバカ」

「バカとは失礼な！ ちゃんと考える頭持つてるよ！」

「じゃア宿題も一人で出来るのか？」

「…」

「ドオーせあのちんちくりんなガキとオリジナルに教わってんだろ？」

「違う、訂正してもらおうか！」

「ほオ…」

「吹寄と御坂妹もだ！」

「…」

「どうした？」

「お前もう一生レベルそのままじゃねエの？」

「えっつ、あんな貧相な奨学金でこれからも過ごせと！？」

「いやいや、変な事に手エ突っ込んで毎回医者に世話になってっから駄目なんじゃないの？」

それと毎回助ける度にその女の子と仲良くなってちゃあ世話ねエよな。とは言わなかった。

A c t ・ 4 1 (後書き)

好きだという方はこの過去話を「そういう事か」と理解してください。

嫌いだという方はこの過去話を「無かった」事にしてください。
あっても無くても、最愛と当麻の間にある絆は変わりません。

ただこの話でいくつかの伏線が回収されているのでそこは見ていただければと。

「」「ちそうさまでした！！」「」

そう言つて各々ゴミ箱に缶を捨てていく。
それを横目に、

「ま、程々にしとけよ。こいつら、結構本気だからな」

と言い放ちその場を去っていく一方通行。

しかしどうやらその本意は当麻に伝わっていないようだ。

「あ…おい、打ち止めはいいのか？」

「お前と一緒に居りゃ安心だ。それに本人がそれを望んでる」

気だるそうに右手を軽く挙げ、

「そもそも杖に頼つてる病人に子守りを任すなっつーンだよ」

「いやいや、俺も病人なんだけどな、一応」

互いに笑いながらその場を後にする。

「あれ、あの人は帰っちゃったの？つて、ミサカはミサカは白い
姿を探してみたり」

「ああ、なんか腹痛いんだと」

一方通行が腹痛になる事なんかあるのだろうか。と嘘をついて思う当麻。

「ま、いつか、ってミサカはミサカは今の状況が凄く楽しいからあの人の事は今は忘れる〜」

「さて、これから私もお楽しみ……だったのですが、定期健診のようです」

「そりゃあしょうがないな」

「仕方ありません、色々彩月花祭の準備もしなければいけないのでここで失礼します、とミサカは深々とお辞儀をします」

そう言っつてこの場を後にする。

「さて、これからどうしましょうか、娘の打ち止めちゃんとフレミアちゃん」

「お母さんの好きでも良いけど、立ち止まってるより歩いてた方が何か見つけたりして用事ができるかも、ってミサカはミサカは上条パパの手を引いてみる」

「上条のお父さん、出発進行〜!」

ぐいーっと当麻の髪を掴み前に倒すフレミア。

「おっとその前に、ちょっとATMに寄りしてくれ。もう金無いんだ」

それを聞いた三人は、

「「「（おっと、これは何か買ってもらえるカンジか？）「「「

とこっさり心の中で思ったのは他でもない。

それを少し離れた所で聞いていた御坂妹は、

「ここぞとばかりに家族関係を示す言葉を使って仲間外れですか、とミサカは一人帰路に着きます……」

そう言いながら、首にかかるハート型のネックレスを見つめる。

A c t ・ 4 3 (前 書 き)

今回も短めです。

次話を長くしています。

とある道

夕暮れ時の空を屋根に、伸びる影が3つ。

暖かい陽に当てられて出来た影が学園都市のアスファルトに張り付く。

そんな時間も時間、そろそろ良い子のみなさんは…

「お腹すいた、にゃあ」

そう言つてフレメアは当麻…ではなくパパのツンツン頭をグイグイ引っ張る。

俺の髪はリモコンじゃないというツッコミは抑える当麻。

「まあ色々遊びましたしね、少しは小腹空いてきたかもしれません」

「よし、じゃあ少し早いけどお夕食タイムって、ミサカはミサカは待望の企画に嬉々としてみたり!」

「おいしいの食べたい、にゃあ」

「んじゃああそこ行くか」

と目線で示す場所は、全国展開するチェーン店ファミレス。
お値段控えめで満腹に量を食べれると、学生で賑わう店。
少しでもお金を控えておきたい当麻として、これほどありがたいも
のは無い。

ファミレス

「こちらの席にどつぞ〜」

と、テーブル席に通される当麻達一行。

テーブル席なので二人ずつ左右の座席に分かれる。

と思ったのだが、

「なしてこっち側に全員？」

当麻を含む一行は通されたまま、その流れで片側だけの席に座っていく。

「私は上条のお父さんに肩車されてて仕方なかったし……」

「私はお兄ちゃ……じゃなくて、あ……アナタに手を繋がれていましたし……」

「要は皆上条パパのお隣で食べたいんだよって、ミサカはミサカは皆の気持を代弁してみる」

と、顔を赤らめながら言われたら否定も出来ず、

「お……おお、そっか」

としか言えない当麻だった。

その当麻の心中は、仲の良い（良すぎる）家庭を持つ父親なカンジなのだろう。

各々がメニューを指差して店員にオーダーを取ってもらおう。

「えっと…俺はこれで」

安めのハンバーグプレートを指さす。

「じゃあ私もそれで」

だったらと最愛も続く。

「ミサカはこれにする」

カロリー控えめ！なチキンステーキを指さす。

「これ食べたい、にゃあ」

肉野菜魚を一度に適量摂取できるお得セットを指さす。

「以上でよろしいですか？」

「あ、あと食後にこのデザートを超お願ひします」

「これ…ですか？ えっと…そういつご関係で？」

絹旗とフレメアが当麻に見えない角度でメニューを持ち店員に追加注文している。

当麻としては”そういつご関係”というフレーズが凄気になったのだが。

「か、かしこまりました。お食事がお済みになりましたらお呼びください」

その店員が注文を受けてくれてから数分した頃。

「あやおや〜？　もしかして上条さんではなからうか？」

と、隣のテーブルに通された女の子二人のうち一人に声をかけられる。

ん？と振り返ってみると……。

「おっ、やっぱり上条さんだあ〜。髪型が独特だからすぐ分かったちゃうんですよね〜」

と黒い長髪にワンポイントの白い花の髪飾りを付けた、中学生とは思えないプロポーションの佐天涙子と、

「か……かかかか、かみ……上条さん……あうう……」

突然の上条との遭遇に慌てて顔を真っ赤にする、頭に花飾りのついた力チューシャを付けた初春飾利がいた。

「チツ、御坂の連れの佐天と初春じゃないですか・・・こんな夕
イミングで」

「あー絹旗ちゃん酷い！」

「同じ年だと最愛から聞いているが…こう、最愛に比べて胸が凄いな
と思う当麻。」

「そんな視線をフレメアは見逃さない。」

「フレメアは自分の胸に手を当て、」

「まだこれからだもん」

と誰にも聞こえないぐらいの小さな声で話す。

「あ、花のお姉ちゃん！」

「えっと、アホ毛ちゃん？ 久しぶりですね」

意外に接点が無さそうな二人が知り合いだったらしい。

「っと、そうだ、どうせだったら合席いいですか？ どうせなら
皆で食べましょうよ！」

「知り合いなんだったら一つの席に集まった方が良いと提案した佐天
だが…。」

「実際には当麻に近づいていこうという作戦の一つ。」

「そ、そうですね、皆で食べると美味しいですし！」

そしてそれにうまく乗って良い所を持っていこうと画策している初

春。

要は二人とも、純粋な気持ちで合席なんぞは狙っていない。

「ん？ああ、どうぞ」

そんな事をつゆ知らない当麻は対席を勧める。

ちなみに余談だが、

当麻を狙う女子達にとって”当麻の周りに女の子が居る状況”は日常茶飯事なので文句を言わない。

むしろその日常に溶け込もうと必死に接触を試みる女子も多いのだ。一日に何本もフラグを女の子に立てて行くので今さら気にしたところで何も変わらない。だったら一番になろうと。

なので、この状況の佐天や初春も特に『また・・・』みたいな反応はしない。

まあ勿論、当麻を好いていない女子も居るので周りから見たらまた女絡みかよという視線を貰う。

そして勿論、そんなモテる当麻を憎む男子は大勢いるのだが、そこは当麻保守派（実際には身辺警護やら親衛隊なんて言うような高能力者以上の女の子集団）が日夜暴動を阻止しているのだ。

もしそれを潜り抜けた所で、当麻の周りにいる最強SPに男共は一瞬にして塵にされる。

話を戻そう。

「いや、すいませんねえ」

「お、お邪魔します」

頭を掻きながらこちらのテーブルへと来る二人。

「「っていつかなんで皆そっち側に？」」

「家族だから！」

とここぞとばかり主張するフレメア。

その言葉を聞いた佐天や初春だけではない、店中の客の視線が集まる。

「え？ か…かぞ…く？ って事はアホ毛ちゃんは上条さんのお子さん？」

あわわわわと取り乱し始める初春。

「ん〜今日だけはな」

と何気なしに言う当麻なのだが、

「あの夜もこの家族も…超遊びだったんですか!？」

と速効で最愛に口を出される。

「えっ、パパ本当なの？」

「うえ〜ん、路頭に迷うよ〜」

最愛に続き、目の端に涙を浮かべながら腕にしがみついてくる二人。

「だあーおい、こら待て、なんだ『遊び』って！ ほんま皆が俺を
変な眼で……」

ひそひそと周囲のテーブルで会話が始まる。

「っていうのはまあ冗談ですけどね」

チロツと舌を出して『言つてやったぜ』とにやける最愛。
それと一緒に打ち止めとフレミアも笑う。

「あー良かった、嘘だったんですね」

と90%信じていた佐天がホツと胸をなでおろす。
その横には嘘で良かったと本気で思う初春がいた。

A c t . 4 4 (後書き)

書き貯め無くなったので本編の更新は一旦停止し、2日後にA c t . 1 2の補完、4日後にC a s . k u r o k oを更新します。

A c t ・ 4 5 & l t ; 1 1 月 2 2 日 更 新 分 & g t ; (前 書 き)

この話で4章を終わらせたいので、今回は長いです

そんな冗談もどうか誤解だと周りの客に伝えれた当麻は席に着く。その間にテーブルにいる全員分の料理が並べられていた。

「パパ、早く座って。皆待ってるよ!」

はやくと手を振る打ち止めと最愛。

「おお、ごめん・・・というかこれって最愛のせいじゃねえか」
「そんなことはいいいから早く席についてください。超お腹減りました」

「「「そうですよ」」」

なるほど、どうやらこの女の子達は揃いも揃って料理優先か。そう思いながら自分の席に・・・というか最愛には一回席から出てもらい、自分の席に座る。

「んじゃあそれでは」

「「「「「いただきますっ!!!」」」」」

賑やかな宴会が始まった。

「ぶつちトマト〜ぶつちトマト〜」

「アホ毛ちゃんはトマト好きなんですか?」

「そうだよ、身体に良い野菜に好き嫌いはいないよ〜」

「偉いなあ。フレメアちゃんは？」

「グリーンピースが苦手・・・にゃあ」

「あれま、グリーンピースは美味しいのに」

「フレメアは超お子様ですからね」

「む、最愛のお母さんだつて嫌いなものあるでしょ？」

「私には無いんですよ。好き嫌いしてたら大きくなれませんし」

と言った矢先、自分の目の前に居る佐天・・・の胸を見てイラッと
したように、

「そもそもその胸はどうしたらそんなに！」

「え？ 特になんか意識しては無いけど・・・けどバストアップ
の秘訣はこれかもしれない」

その佐天の言葉に、胸無い女子達は聞き耳を立てる。

「ムサシノ牛乳です。固法先輩だつて愛飲してるんですから折り

紙つきです！」

「お兄・・・じゃなかった、アナタ、早速10本ばかり買いまし
よう！」

「そうだよ、パパ、これは一大事だよ！」

「女の子にとっては死活問題だ、にゃあ」

「私も飲もうかなあ」

とボソツと呟く初春だった。

そしてその生々しいガールズトークを聞いて顔を真っ赤にする当麻
だった。

それから少しして

「「「「「むむむむむ」」」」」

と何故かお互いを見合う女の子達。

それは何かを狙っている目。

緊張の糸が張り詰めるその状況を真っ先に潰してきたのはフレメアだった。

「上条のお父さん・・・」

子供だからこそ低い位置からでの上目づかい。

「お、どうした？」

「私、グリーンピース食べられないの、だから代わりに食べてほしい」

「ん？ 嫌いなもの食べないと大人になれないぞ？」

「お願い！」

「しょうが無いな・・・今回だけだからな・・・」

そう言っつてフレメアの料理から器用にグリーンピースだけ取り除く。

「んまあ、貰いっぱなしも悪いし・・・はいよ」

と当麻が自分のハンバーグを二切れ（フレメアが一口で食べれる大きさの物）、フレメアの食器へと移す。

それを見て各自色々思ったのか、自分の料理を見る。そしてそれから口を開いたのは意外にも初春だった。

「上条さん！」

それはそれは周囲の客をイラつかせ、そしてその輪に入れない最愛と打ち止めもイラつかせていた。

それは何故か。

食事の合図はした。皆少しづつだが喋りながら料理を食べていた。

佐天・初春・フレミアはゆっくりちよこちよここと。

最愛・打ち止めは沢山もぐもぐと。

余っている量も違えば当麻に与える印象も全然違う。

ゆっくり食べれば女の子っぽくお淑やかに（将来有望）。

沢山もぐもぐ食べれば元気いっぱいいな女の子（将来体系が有望）。

それを今になって気付く最愛と打ち止め。

二人は負けたのだ。

「くっ……くっ」

このような感じで、常に当麻の周りではこのような心理戦（？）がある。

その後に来た特大パフェ（家族用）がテーブルに来てまたひと波乱。今回ばかりは目がくらんだのか、全員がパフェにのったお菓子の取り合い。

それを最初は遠慮がちにみていた佐天と初春も、次第に甘い匂いにつられて参加。

当麻の目の前で凄い勢いで減っていくパフェ。

ここだけ野生の動物いるのではないかと錯覚してしまうほどだった。

「「「ごちそうさまでした〜！！！！」」」
「「ごちそうさまでした」」
「ほい、ごちそうさん」

当麻と食事を分け合った者達は嬉々とし、
一人寂しく食べていた者達は落ち込み、
当麻は何も考えず、いつものように食物への感謝を述べる。

「あ、そうだ初春、今日初春の家行つていい？」
「え？いいですけど、何かあるんですか？」
「例の作戦だよ、作戦」
「その相手が今目の前に居るのにですか？」
「そうそう。それでまあ、着れるか最終確認しなきゃ」
「えっ……もしかして……」
「うん……今回はその…ブラが…ね」

その言葉に敏感な彼女達。

「げっ、また脂肪増加ですか!?!」
「絹旗ちゃん、その言い方は無いよ」
「ただでさえ大きいというのに〜ってミサカはミサカは嫉妬の目でみてみたり〜っ!!」
「私だつて将来……大きくなるもん…ぐすっ」
「……揉まれると大きくなる……とかよくネットで見るけど……うう」

そんな情報の真偽を知ってか知らずか、少女達（初春も含む）は自分の胸と佐天の胸を見比べる。

というか君達さつきまでパフェをがつつり食べてたよね？その糖分やらなんやらは全部ノーカンかよ・・・と心の中でツッコむ当麻。口が裂けて言えない。

「同じ年でそれは超どうなんですかね！」

「去年まで小学生だったのに・・・もうこれは凶器ですよね」

佐天と同じ年の二人は育ちの違いに。

「ミサカには御姉様のDNAが入ってるから今はまだこんなんだけど・・・」

「フレンドお姉ちゃんも胸無いからなあ・・・」

姉達のそれを思い出し、自分の将来が気になる打ち止めとフレミア。

「あ、あのー・・・」

この状況に耐えられなくなった当麻は声をかける。

「そろそろ帰らないと初春さんも佐天さんも大変なんじゃないか？」

「あー本当だ、もうこんな時間・・・」

「楽しい時間はあつという間ですね」

しゅん、と初春の頭に乗る造花が錯覚か少し頂垂れたような気がした。

「わあ、外はもう暗い、にゃあ」

「お腹一杯になっても眠くなってきたかも・・・ふああーって、ミサカはミサカは欠伸してみたり」

「そろそろ打ち止めもフレミアも眠いみたいですし、今日は帰りましょう」

「そうだな。今日は楽しかったよ。初春さん、佐天さん。また明日だよな？」

「明日・・・そういえば上条さん達も彩月花祭行くんですか？」

「ああ、なんか大勢でぞろぞろと」

「やつぱり・・・」

「とか言っておいて、私達も当日に上条さんの家に突撃しようかとか話してたんですけど、丁度いいですね、私達も一緒に行きます！」

「分かった。ちなみに集合は俺の寮の前。多分午前中には寮に戻るだろうし」

「午前中ってどこかに行かれるんですか？」

「いやいや、今俺入院してるんだよね。まあ経過は順調だから明日には退院できるだろうし・・・」

と、ここで初春がバンツとテーブルをたたく。

「なんでそんな大切な事言ってくれなかったんですか!？」

「あーあのー、言っただけ心配させるのは悪いと思ったからであって・・・」

「言われないで隠される方が・・・もっと辛いんですよ!」

多分そこには、初春なりの事情があるのだろうが言う事は「もっとも」で。

「そうだな、ごめんな。今度そういう事あったらメールするから「約束ですからね」

そう言っただけで見る笑顔は当麻・・・だけでなく、最愛と佐天をも虜

にする。

「佐天、なんでしょうかこの気持ち・・・」

「うん絹旗ちゃん、いつもより一層初春のスカート捲りたいよね」

「ちよつと待ってください、その言い方したら私が初春と会う度にスカート捲りしてるみたいなニュアンスになるじゃないですか！」

「え、違うの？」

「一回もしてないです！　というか佐天に捲られる側なんですけど私」

「でも絹旗ちゃんのスカート捲っても恥ずかしがらないんだもん、おもしろくない」

「スカート捲りされて恥ずかしがる顔を楽しいって・・・佐天はそういう人間だったんですか・・・」

「おおう、絹旗ちゃんの私を見る目が痛いよう・・・」

そうして、夜の晩さん会は幕を下ろした。

・夜の病室

「さて、そろそろ寝たい訳ですが・・・」

本当は真っ先に自分が寝るべきベットを遠巻きに見ている当麻。

と言つのも、今はこんな状態になっている訳で。

「絹旗あゝ、なあゝんで私ら呼ばないでふらふらと当麻と遊んでたのかねえ〜」

「今言つたら許してあげるよ。多分許さないけど」

当麻達が病院を後にしてすぐ麦野達は来たのだが、目的の当麻がいないので大人しく今まで待つていた。
果たして”大人しく”していたかは浜面しか分からない。

「フレメアまで連れ出して・・・私、結構心配したって訳よ」

「ううん、お姉ちゃん嘘ついてる。実は自分も行きたかったの隠してる、にゃあ」

「だつはっは、フレнда言われてやんの〜」

「浜面、四肢の何処を爆散させてほしい？」

「ひいい、恐ろしい単語聞こえたけど!？」

フレндаは一応、危険物取扱の資格を持っている。

仕事の都合上、そういうのを取り扱うかとも思い取つておいたのだが、

仕事でそのような事は一切しないという事なので無駄に終わった。
ちなみに本人曰く”本当に危険な物（麦野）は取り扱えない”のだ
そうだ。

「それで、言い訳を聞こうかしら」

「だって・・・私より年上しかいないじゃないですか」

「? 年上だからどうしたよ?」

最愛としては、あのメンツで母親役が出来た訳で、アイテム勢が揃えば一気に妹の座になり下がる。

いや、もともと妹なのだけだ。
単に邪魔されたくないから呼ばなかったまでの事。

と、そんな問答のすぐ隣ではフレメアと打ち止めが。

「今日も私がここに寝る〜ってミサカはミサカはM Y枕をパパの枕の横に置いてみたり〜」

「昨日もそうだった！ 今日私！！！」

「あーっ、ミサカのゲコタ枕を投げ捨てた〜！ってミサカは地面に横たわるゲコタを悲しい目で見つめてみる」

打ち止めが持つてきたゲコタ枕（柄とかでなくゲコタ）、それが今病室の冷えた床とキスしている。

何ともシユールな絵だ。

なんでも、こっちはこっちでどちらが当麻の横で寝ようかと揉めているようだ。

右に最愛が寝るのは決定事項、と最愛自身が釘を刺していたので当麻の左側の取り合い。

というかこの会話の前後の節々に出てくる単語、「抱きつく」「抱きつかれる」が不穏過ぎる。

上条当麻はそんな事を飄々と出来るキザな男ではない。断じて。

「ん？ 今『パパ』って言わなかった？」

と、最愛に迫まる手を止めて打ち止めに尋ねる麦野。

「うん、言ったよ。パパって」

「そうそう、パパ」

そついいながらフレメアは当麻を純粋な笑顔で見る。

「「「「「.....」」」」」

アイテムメンバー（最愛以外）は黙りこむ。

ここでいち早く気付いた麦野。それはレベル5の頭脳を持ってこそ
のスピードで。

「なるほどねえ、絹旗が何で呼ばないか分かったわ」

「は？え、何？どういう事か全然分からないって訳よ！」

「ねえ、どういう事なのか説明して、麦野」

「ん〜？ どうしよっかなあ〜」

なんてやっていると思者がやってくる。

「君達、また騒いでるの？ 元気なのは良いけど、羽目は外さな
いでね？」

「あ、すみません」

「上条君、君は明日の朝退院なんだからもう寝ないと駄目だよ？」

「はい、そうします」

いそいそとベットに戻る当麻。

それに続いて最愛・打ち止め・フレメアがベッドに入っていく。

「君達って、そういう関係？」

「多分あなたが思ってるような関係じゃないですから」

「なんだい、そりゃあ残念だね？」

「残念がる意味が分からない.....」

「冗談だよ」

「言葉の真意が見えないですから、それ」

「さて、もうそろそろ上条君は寝るようだが・・・君達はどつするの?」

ベッドに入っていく当麻達を見ながら、医者は麦野達に問いかける。

「私達も一緒にくっついて言いたい所なんだけどね」

「明日の入念な準備があるから」

「ここで大人しく帰って、大人っぷりをアピールする麦野と滝壺
って訳よ」

「もうひとつ用事出来た。フレンダにお置きもだ」

「余計な事を言って麦野を怒らしちゃうフレンダと浜面を私は応援する」

「何故そこに俺の名前が・・・」

「ホラ、さつさと帰るわよ。車出しなさい」

「えーっ、また俺を足扱い?」

「アンタは足でしょ、どう見ても」

「こんな上司は横暴でーす」

「よし、もう一つ用事できた」

「ぎゃー!!--」

「そういう事だから、上条、バイバイ。大人しくしてるんだよ」

「明日を楽しみにしてれば麦野のあの姿が・・・」

「そうやってハードル上げないでよ。まあ、軽々飛び越えてやる
けどね」

三人はそう言って病室を後にする。

「おい・・・上条・・・」

と、まだ病室に残っている浜面が口を開く。

「なんだよ、まだいたのか？ 早く行かないと麦野に怒られるぞ」
「そうですね。麦野怒らすと後で怖いんですから超早く出てってください」

「とか言ってるけど実際は邪魔だから早く出て行って欲しいなって、ミサカはミサカは本音を言ってみる」

「浜面邪魔だから早く帰って、にゃあ」

浜面の視線から見える光景は、当麻を囲む少女らが自分に対して邪魔だという光景。

邪魔だと言われるのは慣れていたので心に傷は負わないが、問題はその状況。

当麻の周りの人口密度 > 浜面の周りの人口密度。

片や石油ヒーターに当たりながらコタツに入っているかの様な暖かさ、

片や北極の海の中で雪見大福を丸かじりしているぐらいの寒さ。

温度差はすさまじい。

これがリア充と独り身の差か、畜生。

「リア充はもげて爆散して塵になって風に吹かれて千の風になって、あの大きな空を吹きわたってる畜生！！！！ うわあああああああ
ああん！！！！！！」

と、浜面は捨て台詞を吐いて走って出て行く。

「あの空って何処だ・・・？」

「まあ、アナタは気にしなくていいです。あんな超バカ面なんかほっといてください」

「そうそう、もう寝ようよパパ」

「私がお父さんの横貰った〜！」

「あ〜っ、フレメアはミサカに喧嘩を売ったということだな、ってミサカはミサカは・・・」

「はいはい、もう寝よう。明日は朝から忙しいから」

「そうですね、もう寝ましょう」ギョッ

「むむっ、なんだか夫婦の貫録みたいなのが出てきたね、ってミサカはミサカはさり気なくパパにくっついてるママに嫉妬してミサカもくっつく〜」ギョッ

「お母さんだけのお父さんじゃない！ 私も、にやあ！！」ギョッ
「もの凄く暑いんだが・・・」

夏の夜の蒸し暑さ、彼女達の体温。

とても暑く、熱く、篤い。

病室の窓に映る姿は、一家族というそれでは無く両手に花状態で顔を真っ赤にする当麻だった。

A c t ・ 4 5 & l t ; 1 1 月 2 2 日 更 新 分 & g t ; ; (後 書 き)

多分今までで最長じゃないですかね？

詳細は活動報告見ていただけるとお分かりかと思いますが、これで現在の書き貯めを全部失いましたw

次話、新章第一発目の話を出来るだけ長めに、そして出来るだけ二日更新出来るようにしたいと思います。

切りつける < trancher
le vrai du faux > 白黒ハツ

Cas·kuroko

Cas·kuroko

・高校寮 男子生徒の部屋

「超ただいま帰りました！」

ニコニコと満面の笑みで帰ってくる最愛。
もちろん、少しでも当麻と過ごす為に学校から直帰である。

「つてあれ、まだお兄ちゃん帰って無いじゃないですか」

玄関で靴を脱ぎ揃えているときに当麻の靴が無い事に気付く。

この部屋の本来の持ち主である当麻はいない。

居ない理由は明白で大方、小萌先生のラブ補習が不良との追いか
つこだらう。

しかし、

「補習だったら遅れる旨のメールがくるはずなんです…」

確認の為に携帯を開き、メールフォルダを確認する。

メールボックス

家族フォルダ

お兄ちゃん

『新着メールはありません』

「どつやら無いみたいなので…」

という事は後者、

「女の子を助けたついでに不良と追いかけてっこでしょうね」

最愛は早速野暮ったい制服を脱いで、いつもの丈の短いワンピースを着る。

「まったく、しょうがないお兄ちゃんですね…」

と言う少女は、どこか子供の悪戯を許す母親にも見える。

・街

「まったく…流石に撒いたろ…」

走ってきた道の遙か後方を見張る当麻。

その右手には勿論、助けた女の子の手が繋がれている。

そういう事を通常運転で出来る男、それが上条当麻なのだ。

「もし、類人猿さん？」

そういう女の子は赤いツインテールを揺らしながら、

「そろそろ手、離していただけません？」

さぞかし面倒くさそうな顔で当麻を見る。

「怪我無いか、大丈夫か白井？」

「あのですね、貴方が私に触れさえしなければあんな不良なんて
ボッコボコですよ」

「いやだから、怪我は…」

「それなのに横からいきなり飛び出したかと思えば…」

街で不良に絡まれた黒子。

容姿は胸を除けば（しかしその趣味の人は除かない）美人の部類に
属する黒子。

寄ってくる男は多い。（寧ろ当麻は何かと寄ってくるが）

もちろんさっきまでの男達を能力で応戦してジャッジメントの権限
で拘束、

ついでに豚は豚らしくブタ箱に送ってやるうと思っただが…。
そんな最中、当麻が横から黒子をお嬢様抱っこして搔っ攫った。
その光景を見たギャラリーは、

『熱いわね〜』『青春だね〜』『私もされたい〜』
とそれぞれの感想を述べていたのだが。

そんな微笑ましい光景が不良達の気に障ったのか、

「「待てやコラ、ウニ頭ああ!!!」」

そうして不良とのマラソン大会が始まった。

そんなこんなで逃走中の路地裏。

やっとの事で自分がどうなっているかを理解した黒子は、当麻の腕
の中で暴れる。

「離しなさい類人猿！　ってちよつと、どこ触ってるんですの！

！」
「だあーっ、お前が暴れるからだろって、あ……」

当麻の手には柔らかい感触が。

憤まじやかなお尻を比較的しっかりと掴んでしまった。

そして額からは物凄い大量の汗が…。

「えーっ和白井さん…あのーこれは不慮の事故でございまして…」

ワナワナと、自慢のツインテールを僅かながらに揺らす黒子。

「そもそも、白井さんが暴れた事がキツカケでありましてですね

…」

「つていうか、本来の目的は…」

「おうお嬢ちゃんとう二頭、やっと見つけたぞコラ!!」

「ほらぁーもー!!!」

そう言っつて当麻はまた黒子の手を取り全力疾走する。

「気付けば目の前には俺の寮が…」

そんなこんなで結局、黒子の手を牽いたままここまで来た。

そもそも、当麻が手を離してくれれば黒子だけ逃げられたのだが、当麻は気付かなかった…というよりも黒子の話を聞いていなかった。

「ふんっ…流石類人猿ですわね」

と、何故だか独りでに物事を理解したような黒子は、

「あなたはこうして、助けた女の子一人一人を自分の寮に誘い込み襲うという史上最もお下劣下等類人猿だということですよ。あついや、それはお猿さんに失礼ですよわね」

「は？」

「ここはジャッジメントの権限で貴方を現行犯で…」

カシャッと、当麻の右腕に違和感が…

「拘束させていただきますわ」

当麻には無意味なのだが、能力を発現させないような仕組みになっている手錠を掛ける。

「ちよつと待て、それは誤解で…」

「今こうして貴方の寮の前まで来た、それが十分すぎる証拠ですわ」

まあ、と続ける。

「これで貴方がブタ箱なり何処かに消え失せてくれれば、お姉さまもつつつを抜かさずに黒子だけを見ていただけでしょうし」

トンデモな私情を挟んだ拘束…それは果たして許されるのだろうか。と、そんな話をしていると…。

「あれ、お兄ちゃんじゃないですか」

寮の階段を下りてきた最愛とはち合わせる。

「というよりも、何こんなところで白井と拘束プレイしてるんですか…」

その兄と学友の異様な光景に、思わず引く。

「違う、これは冤罪で…」

「この類人猿は、不良に絡まれ心が弱った女の子を拉致し自分の寮に連れ込むという…」

「白井はそんなことをお兄ちゃんがすると…というか出来る度量があると思ってるんですか？」

黒子は数秒考えたのち、

「それもそうですわね」

「でしょう？ あつたら今頃私は襲われてますよ」

そんな会話をしながら手錠が外される。

何というか、度胸が無いと散々バカにされた揚句に義妹を襲つかもしれないという、

変態レツテルを張られた当麻は心の中で『理不尽だ…』と叫び泣く。

「あら、結局このお猿さんと一緒に住んでいるんですの？」

「ええ。私に家はありませんから」

「だったら常盤台の寮にでも…」

「お金ありませんし」

「多くはありませんが、お貸しできる程のお金は持っていますわ

よ？」

「いいえ、お金は借りるなど兄に言われてるんで」

そういつて、少し離れた所でorzの体勢で泣いている当麻を見る最愛。

それにつられて一緒にみる黒子。

その光景から微塵も当麻の良さが分からない黒子は小さな声で最愛に問う。

「…こんな類人猿の何処が良いんですの？」

お姉さまも、もちろん貴方も…とは流石に言えなかった。

「まあ、黒子には分からないでしょうね」

「はあ……」

「本当にピンチになったら颯爽と助けてくれるんです。それも結構不器用に。そこがまた格好いいんですけどね」

「……よく分かりませんわね」

「どうやら黒子に、当麻（というより男全般）の格好よさ談義は一生縁の無い話の様だ。」

「というかそもそも、ただでさえ御坂だの御坂妹だの吹寄だので敵は多いんです。白井は絶対こっち側に来ないで下さいよ」

「頼まれても行きませんわよ」

「そう。ならいいんですけど。ってそうだ、お兄ちゃん」

相変わらずorzの当麻に呼びかけ近づく。

「なんだ…最愛…ぐすっ…」

「おっと、これは結構な攻撃食らいましたね」

与えたのは私達ですわ、と心でツッコむ黒子。

「そろそろ晩ご飯の時間です」

「おお、そつか。今日は何が食いたい？」

「お兄ちゃんの選んだのでいいですよ」

「……じゃあ、オムライスとかでいいか？簡単だし」

「はい。じゃあ早速材料買いに行きましょう」

当麻の腕を引っ張り立たせる最愛。

「さつき冷蔵庫確認したら調味料だけありました」

「どんだけ貧乏なんですの」

思わずツツコミを口に出してしまう黒子。

「白井は知らないだろうがな、最愛は食つぞ」

「だって美味しいんですもん、お兄ちゃんの作る料理」

「それは嬉しいんだけどな、限度つてもんをだな…」

「だからお米は2合でいつも我慢してるじゃないですか!」

「なんで逆ギレだ、それでも多いって言うてんの!」

「だって仕方ないじゃないですか、全部美味しいんですもん」

「そんなに美味しいんですの?」

「ええ。そうだ、だったら白井にも味の判定していただきましょ

う!」

「は?」

と思わず口をぽっかりと開ける黒子と当麻。

「白井も美味しいって言えば、お兄ちゃんは諦めて私にお米を3合食べさせてください!」

「いやいや、趣旨とかなんか色々ズレてるけど。というか白井は強制参加かよ」

「それでいいですよね、白井!」

「何故こうなったのか良く分かりませんが、まあ別段と今日は非番で用事も無いですし、

殿方とだけならお断りですが絹旗さんがいるのなら大丈夫なようですよ!」

というのは口実にただ、ここまで美味しいというなら確かめてみたいなと思った黒子。

「いやいや、その”上条さんは心の葛藤にすぐ負けて手を出す”みたいなイメージはなんですか」

「違うんですの？」

「こつやってどんどん白井から見た俺の好感度メーターは下がっていくと…」

「もともとゼロですけどね」

「って言う事はマイナスじゃねえか！」

「そうですね」

「分かった…！」

そう言っただけで右手を握りしめる当麻は、

「だったらそれがプラスに行くような美味しい料理を白井に作ってやる」

その拳を黒子に向けて、

「あつと驚かしてやつからな、覚悟しとけよ」

言い放つ。

「どごぞの典型的なチンピラですの…、『覚悟しとけよ』って」
少し口元がゆるむ黒子。

「まあいいですわ、では早急に作ってくださいな、丁度お腹が空
いてきた頃合いですし」

「よーっし、んじゃまずはスーパーに」

「超レッツゴーです」

「えーっと、卵も無いんだっけ？」

「ええ、丁度一昨日無くなりました」

「んじゃあここの安売りの卵を…」

そんな光景を数歩離れた所から見る黒子。
横に並んで…というのも変だし、だからといって離れすぎるのも変
だし…。

「しかし何ですの、このモヤモヤは…？」

「ん？なんか言ったか、白井？」

「え、いいえ特には…」

「あ、そうか、白井は常盤台の美味しい料理食ってるんだもんな、
安売りされてる卵は駄目か」

「いえ、そういう訳で言ったのではなくて…」

「でもお兄ちゃんの料理は、安い材料で美味しく作るってのが売
りですから」

「なんか悲しいな」

「事実です」

「とにかく、材料はいつも使ってる物でいいですよ」

「すまないな」

「いえいえ、お食事が頂けるだけでも十分ですよ」

と、心からの気持ちを言うと、

「なんか白井、可愛くなっただな」

「は!?!」

予想だにしないコースからの変化球は、容赦なく黒子のミットに収まる。

僅かに身体に籠る熱さと、早くなっていく鼓動。顔が真っ赤になる。

「な…何を言ってるんですのぉ!」

「ああ、変な意味じゃ無くて、俺に対してトゲトゲしなくなってるっていつか」

「…」

それを無言で見ている最愛。

「まあなんだ、白井もちやんと女の子してるっていつか、

ずっとそうしてりゃあ可愛いんだからすぐ男出来るんじゃないかねえか?」

「か…可愛い…？ 男が出来る…？」
「…」

脳のキャパシティよりも膨大な情報を詰め込まれた黒子のHDDは煙をあげる。

「おい白井、大丈夫か？」

そう言っつて顔を覗き込む当麻に、白井は目を回し倒れる。

「おい、しっかりしろ白井、おい、大丈夫か？」

必死に白井の頬を叩き意識の有無を確認する当麻。

「ううん…」

「どうやらただの気絶か…とはいえこのままじゃあ寝せられないし…そうだ、最愛！」
「…」

無言無表情で近づくと最愛。

「ちょっとこれ持ってきてくれ」

と買い物カゴを渡されて受けとる。

「俺が白井を背負ってくから先に行っつてくれ」

「お兄ちゃん」

「ん、どうした？」

黒子を背負いながら最愛の方を見る当麻。

「…もういいです…」

そう言つてスーパーの奥へと駆けて行つた。
黒子を静かに背負つた後、最愛を追つ。

「おい、最愛！」

「…」

「最愛つてば！」

話しかけるも、一向に当麻に向かない最愛。
その間もスーパーを歩いていく。

「…なんですか？」

ヒヤリと突き放す。

「なんだじゃねえよ、いきなり走つて…」

「さつさと材料を買つて”可愛い”白井に料理を作つてあげるんでしょっ…」

「え？」

「で、私はどうやらお邪魔のようなので…」

米のコーナーにあるお米5kgを無造作にカゴに押し込み、

「…さつさと食材買つておこつと思つてたんですが？それすらも超迷惑ですか？」

そうして当麻を見る最愛の頬は濡れていて

「迷惑な訳ねえだろ……」

そっと胸に抱き寄せる。

「どうした、最愛らしくねえぞ」

黒子を左腕で支え、右腕で最愛を優しく抱き寄せる。

最愛は当麻のYシャツに顔をうずめ、当麻の顔を見ないようにする。

「だって……お兄ちゃんが白井を可愛いとか言うから……」

「それはほら、それほど可愛かったら彼氏の一人ぐらいいるだろ
って言う意味で」

「（お兄ちゃんは自分の発言力の大きさを分かって無いんです……）」

それに、と当麻は言う。

「白井が可愛ければ最愛だって可愛いぞ」

ギョツと、当麻のシャツを掴む力を強くする。

「……白井と同じですか？」

「いや、それとは別。最愛が俺といる時、話してる時、食事してる時、買い物してる時、寝てる時、その全部が可愛い。って気持ち悪いな」

「気持ち悪く無いです」

「そっか。まあなんだ、俺にしか分からない最愛の可愛さは、他の誰とも違つよ」

これが当麻なんだ、と噛みしめる最愛。

その頬は濡れていず、代わりに赤みが増す。

シャツに顔をうずめた理由に、涙を拭うというのもあったのだろう。

それから少しして。

「お米と…卵と…野菜と鶏肉…飲み物…あとは明日以降の弁当用のおかず…」

すっかり機嫌を直した最愛と当麻（と背負われている黒子）は並んで歩く。

その光景は物凄く異様で、若いカップルの男が女の子を背負って買い物という、ハタから見ればよく分からない絵になっていた。

「それで全部だろ。んじゃあレジ行って会計済ましておいてくれ」
そう言っただけで制服のズボンの尻ポケットから財布を出す。

「分かりました。ではスーパーの前で待っていてください」
「おう」

レジでの会計を最愛に任せて、スーパーから出る当麻。すれ違う客はそれを見ては「何だコイツうらやましい」という視線を浴びせる。

出入り口のすぐ近くにあるベンチに黒子を寝かせる。

と思ったのだが、何故か黒子の腕はがっちり当麻の首をホルドしていて離せない。

「ちょ、白井、首…」

とは言っているが、黒子には聞こえていない。

「はあ、不幸……だよな」

一瞬当麻は女の子とこんな密着出来るウフイベントは幸運だと思っただが、

それを口にする、最愛の一週間無視（30分で最愛が耐えきれずに喋り出す）や黒子の瞬間移動後頭部ドロップキックという痛い罰を受けるので言わずにおいた。

「それは流石に白井に悪いと思いませんか？」

会計も済ませ、品物もビニール袋に入れて持つ最愛が出口からやってくる。

「ああ、今のは失言でした。超聞き逃してください」

「？」

「さて、では超早急に帰りましょう。もうお腹がペコペコです」

「そうだな、帰ろう。っとその前に…」

スツと手を差し出し、最愛が持つ一番重い袋を持つ。

「それ、お米が…」

「女の子に重い物は持たせられないだろ」

「でも白井も背負ってますし…」

「重く無いさ。さ、行こう」

「…はい…」

「…ん…うん」

当麻の寮へ帰る途中、意識を取り戻す黒子。

「（私は一体…）」

うつすらと目を開けるとそこには、ツンツンに尖った黒髪が…。

「（な…なんで私はこの殿方の背中に負われているんですの…？）

意識を失うまでの記憶を思い起こす黒子は…また顔を赤くするのだった。

今までの黒子ならばここでまた大暴れ…なのだが…、

「（どうしてでしょうか、この暖かさはどうも…抗えませんか）」

最愛に話しかける声が聞こえ、

背中に耳を当てれば当麻の声と息遣いが振動で伝わる。

「（少しくすぐりたい…）」

そっぴう黒子はほほ笑む。

「（たまには怒らない日があってもいいのかも知れませんが）」

そのもたれ掛かる背中中は私よりも大きく、

「（最近は仕事も忙しかったですし・・・）」

黒子は体重を全て当麻の背に預け、

「（多少の休息でしたら、固法先輩も初春も許してくれるでしょう）」
「（う）」

また、瞼をそっと閉じる。

「（果たして…お姉さまはどうでしょうか…）」

「おい、白井、出来たぞ〜」

空腹を刺激するトマトケチャップの香りと、先ほどまで近かった声が黒子に届く。

「これが、お兄ちゃん特製の超美味しいオムライスです」

コトツと黒子の目の前のテーブルに置かれる。

「これはまた見事な出来映えですわね」

「出来栄えだけじゃありませんよ、食べてみてください」
「白井、寝起きで食えなかつたら無理するなよ」

黄色く艶やかに光るふつくらとした卵。

その黄色を映えるように、赤いケチャップが

「中身だつてもちろん超最高です」

木で出来たスプーンを渡される。

「いただきます」

そのスプーンをオムライスに刺すと、

「完全に固まりきっていない卵が溶け出し、それがお米へと……」
「それも全部計算でやつてるんだから凄いですよね。食欲を超そ
そるんですから」

「上条さんちのオムライスはこうだと決まってるんだ」

「お母様の直伝ですよ？」

「いや、実家で母さんが作ってる所を見た」

「とんだ主婦…主夫スキルですこと」

「女の子としては色々超複雑です……」

見ただけでその味を再現するとは…もしかしたら料理の腕負けてる？
と思う最愛と黒子だった。

「それで、白井の口に俺の料理は合ったか？」

「そうですね〜」

少しドキドキしながら次の発言を待つ当麻と最愛。

「もしかしたら、常盤台の専属シェフ並みに美味しいかもしれませんが」

「やった!」

「へへそんなんですか」

「何で最愛が知らねえんだよ……」

「だって、いつもお兄ちゃんの弁当ですもん」

「俺が起きれない時とかは?」

「食べてませんよ、我慢して夕食に超期待してます!」

「それじゃあ身体に悪いだろうよ」

そんなイチャイチャを目の前で見せられた黒子は、

「…毎日食べたいですわね」

と、爆弾を投下する。

「お、そんなにか?」

「駄目ですよお兄ちゃん、お弁当は私のだけです!」

「いやいや、一人分も二人分も変わらんし」

「それでも駄目ですっ!」

そんな自分の爆弾で荒れた二人を見ながら、
美味しそうに、ゆっくり噛みしめる黒子。

「(そうですわね、将来私の旦那様は料理の上手な方が良いですわね)」

「んじゃあ洗うから食器を重ねて。持ってくるから」
「そこはお任せくださいな」

テーブルに置いてある食器を順に手を触れて行く。

「おお、一瞬にして食器が…」

カシャカシャと、キッチンの方から食器が流しに置かれる音がする。

「ごういう時に便利ですが…それじゃあ超脂肪つきますよ」

「あら絹旗、そういう貴女だっていつも昼食は満腹になるまで食べて。太りますわよ」

「なんですか〜！」

「やりますの!?!」

「程々にしろよ。さてと、食器を水に浸けておくかな…」

当麻はキッチンへと歩いていく。

「はぁ…まったく」

「何が全くですの。貴方は食べすぎなんですよ…少しは自重なされては?」

「とか言いつつも、白井だってお兄ちゃんの弁当を超要求してるじゃないんですか!?!」

「まあ…しましたが…」

「絶対白井も美味しいからと食べ過ぎて…ふっ、太り…ますよ…」

「何で自分から言っておいて、自分の状況を再確認してますの…」

「だってお兄ちゃんスリムな子好きですし」

「なんでそんな事…」

「大体の男の子というのはスリムな子を好み・・・というか私の場合はお兄ちゃんの秘蔵コレクションから分かったんですけど」

「はあ、秘蔵コレクション？」

「白井は知らなくていいです！」

「はあ...？」

「なんだ二人とも、何を話してるんだ？」

作業が終わったのか、二人の会話の中に入ってくる当麻。

「ええ、なんでも秘蔵コレ」「いいえ、なんでも無いですよ、ええ微塵も」

思いつきり暴露しようとした黒子に割って入る。

「ん？ まあ何でも無いならそれでいいけど・・・それより白井」

「は、はい、なんででしょう」

「いいのか、そろそろ門限だけど・・・」

門限まで残り10分。

「あ、本当ですわ！ そろそろお暇させていただきますの」

「忘れ物は無いか？」

「ええ。特に持ち物はありませんでしたし」

「もしあったら後で届けに行く」

「いえ、それは同じ学校の私が届けに行くので...」

「ん、そうか・・・」
「ふふっ」

自然に笑みがこぼれてしまう。

その行為を、当麻を”類人猿”と呼んでいた頃の黒子は決して出来ないだろう。

それは確かな心境の変化。黒子本人も分からないほどにじわじわと。

「どうした白井？」

「いえ、その心配性は私のお父様みたいで・・・少し面白くて」

「俺は白井の親父さんに似てるのか・・・」

男子高校生としては、そのような”老けてる”というニュアンスを含む言葉は凶器だ。

「あ、いえ！ そのような意味で言ったわけでは・・・」

と、あたふたする黒子。

「あーこれでも最近若者チックにおしゃれしてるつもりだったんだが・・・」

「ふっ、これが白井の本音ですか」

「だから！ あーもう、少なくとも私を知るどの殿方よりも格好いいですわ！」

「えっ」

勢いで言った事を後悔し、顔を真っ赤にする黒子。

「・・・あっ、いえ、その・・・別に・・・変な意味は含んで無くてですね・・・」

「・・・」

「ちよつとお兄ちゃん、何で黙ってるんですか!」

「いや・・・なんかこう、白井からそんな言葉聞くとは思わなかったから」

「それはその場のノリのようなアレで・・・!」

「ってというか白井、お兄ちゃんに何言ってくれてるんですか!」

見送りに黙って出来ない、そんな桃色空間が発動される。

「まあ、とりあえずは・・・お弁当、期待しておりますわ」

「おう。毎日美味いもん食わせてやる」

「ええー!! あの話は超本当だったんですか!？」

「もちろん」

「なんで八モるんですかあー!!!」

そんな光景を寮の3階から眺めている女の子が一人。

「ほほう、上条当麻。とうとう白井を仕留めたか」

そう言っている彼女は座っているドラム型掃除機を叩き、

「これは絹旗も大変だなー。でもそれが面白い」

これで当分は話のネタに困らないぞー、と呟いた後、

「おーい兄貴、また上条当麻が女の子引っかけたぞー」

と自分が同居している部屋、土御門元春がいる玄関を叩く。するとそれを聞いた土御門が勢いよく玄関を開けて部屋から出てくる。

「なんだと、カミちゃん!! 世界の宝である義妹が居るにも関わらず、常盤台の赤髪ツインテールの子に手を出すのか!!! それは義妹を愛する俺に喧嘩を売っているという事でいいんだにやああああ!!!」

「こらバカ兄貴、私の前で義妹を愛するなんて言うな、気持ち悪いぞー」

「これは早速青髪ピアスに連絡し、明日学校でどのような罰を下すか作戦会議だにやー!!!」

「おお、凄い速さでメールを打ってる・・・」

「・・・くそう、カミちゃんばかり・・・いいなあ・・・」

「それが兄貴の本音だろー」

当麻の預かり知らないところで、また一つ自分を怨む人間を作ってしまったようだ。

と、その頃、常盤台中学の学生寮、208号室。

「おい、御坂」

「は、はい！」

「今時計は何時を指している？」

「えっと…も…門限をオーバーしてます」

「どうなるかわかるな？」

「れ…連帯責任です」

「お前らは常盤台の看板だからな。規律はしっかり守らなければな」

「はい…」

「ふんっ」

どさっと、御坂の身体がベッドに沈む。

「さてと、白井は一体どこで油を売っているんだろっな」

眼鏡をかけなおし、腕時計をはめなおす。

「まさか…男か？ だとしたら相当厳しい罰を与えなければな」

フラれ続けてばかりの寮監はその類の事例は許さない。

ただの逆恨み。というか嫉妬。

罰を受ける側としてはたまったものではない。

「私より先に男が出来るなど…羨ま…ではなく勉強が本業である学生にとって許されない事態だ！」

つつかつかと、いつにも増したハイヒールが床を叩く音は寮生を脅かす。

その日、いつもよりも大きい黒子の悲鳴が常盤台寮から聞こえた

か。

C a s ・ k u r o k o (後書き)

どうだったでしょうか、C a s ・ k u r o k o。

これが”あの御坂一筋だった黒子”を落としたお話です。
個人的には懇親の出来でした。

以上でアクセス20万記念を終わります。

新しい話を読んでいただく前に（前書き）

本編とは全く関係ない内容になっています。
ただ、今後については書いていきます。

新しい話を読んでいただく前に

- 1、今までのA c t . 0 4 4まで読んでいただけただけでしょうか。
- 2、A c t . 4 5はお読みいただけただけでしょうか。
- 3、各A c tの前書き、後書きを読んでいただけているでしょうか。
- 4、読者のみなさんから送られた感想、あの返信の中には色々と重要な事が書かれていたり・・・。
(無理に読め、とは言いませんが)

ここ最近では文章の割り込み機能を使う事が多く、更新日時が前話更新されたままの時があります。

しかし、A c t . 3 6以降は2日毎の更新をしているので、NEWと無くても更新しています。

また、本日運営に対して「割り込み機能を使った時に更新日時も変更されるような機能に改善して欲しい」という要望を送った所、検討して頂けるようです。

私のこのSSが完結する前に機能が実装される・・・という事は無いと思いますが、出来る限り早急に改善してくれる事を願うばかり

です。

この話題の下からまた本編を更新していくのでNEWという表示が出るので今回の話は関係が無いように思えますが、完結した後ももし書く事があれば、割り込み機能を使つての更新をするかも知れないので、この場を借りてお伝えしたかったんです。

今後についてですが、次の章で完結という風にしようと思つていますが、

あまり長引いても、読者のみなさんが飽きてしまつと思うので区切りのいい所で。

また、終わり方のイメージは粗方ついたので、それに肉付けしていく形で書いています。

それと引き続き、

感想や誤字脱字、設定不備や説明してほしい事等ございましたら是非SSの感想の欄か私へのメッセージでお送りください。

一つ一つ丁寧に対応していこうと思ひます。

どの作品も読者様があつてこそです。

今まで貰えなかつた読者様からの感想は凄く嬉しいものなのです。もちろん、毎回感想をくださる読者様へも感謝しております。

読んでいるだけの読者様、どんな内容でも結構です。

私は読んでるぞ！みたい一言でもいいので。

また、胸にモヤモヤ貯めている不可解な点はドンドン言ってください。
ると。

正直書いてる自分は気付かない事も、読者様だからこそ気付いたりも出来るので。

以上で、この話を終わって、本編の執筆活動に戻ろうと思います。

【必読】読者の皆様【更新について】

今、様々な周囲で起こる出来事の全てが落ち着くまで更新を不定期にさせていただきます。

著者の勝手な都合で本当に申し訳ないのですが、今の状態のまま「上条with絹旗」は執筆出来そうに無いので、

本当はこのようなことは活動報告に書くべきなのでしょうが、一般のユーザーさんは活動報告を見れないと思うのでここに書かせて頂きました。

「上条with絹旗」を楽しみにして下さっている読者の皆様、少しの間待っていただけると嬉しいです。

また、上記に伴って年末年始のご挨拶をご遠慮申し上げます。ここに平素のご厚情を深謝いたしますと共に、明年も変わらぬご交誼のほどお願い申し上げます。
なお、時節柄、一層のご自愛の程お祈り申し上げます。

たけんちゅ

A c t ・ 4 6 (前書き)

お待たせしました！

短めですがご覧になってください。

・朝

「もう驚きませんよ、私だって・・・私だってこんな立場じゃなかったら！！！！」

明るさを得た当麻の病室。

それはカーテンに遮られた朝日が、遮りが無くなった事を良い事にベットで寝ている当麻達に当たる。

そして起きて早々、看護婦に叫ばれる当麻。

「なんですかいきなり・・・」

「ここまで言っても分からないの!？」

うう・・・と涙目になる看護師。

ここまで言っても・・・というより、こんなんじゃあ鈍感な当麻は気付くはずもない。

気付いていたら今当麻の周りにはガールフレンドで溢れかえっている事だろう。

というかそんな男がいてはいけないと思う。

「ふあああ・・・おはようございます」

いつものように起きる最愛。

これも今日で終わり。病室でしか当麻は最愛と一緒に寝ないから。少し残念そうな、もっと味わっていたかったと心から思う最愛。

「うー、まだ寝てたいかも、ってミサカはミサカは枕に顔を埋めてさっき見た夢の続きを見れるのを楽しみにしたり・・・」

朝日が眩しすぎなのか、瞼は閉じたままモゾモゾと枕に顔を埋めようとするのだが、

「打ち止め・・・それは俺だぞ？」

「ん？ あれ、本当に夢の続き？ってミサカはミサカは・・・」

「完全に寝ぼけてるな」

ぎゅーっと打ち止めに腰をがつつりホールドされつつ頬ずりされている当麻。

それを最愛が見て、

「ん、まあ、いつもは私がお兄ちゃんを超占有してますし、今ぐらい許可しましょう。今だけ」

「俺は最愛の占有物かよ」

いつもだったら『私も！』なんて言うのに珍しい・・・と思う当麻。思うだけ。

「え、そうですよ？ 知らなかったんですか？」

「寧ろ何処で知るんだよ」

「実感してないんですか？」

「なんだかなあ・・・」

ポリポリと頭を掻く当麻。

何かいつもとは違う・・・そんな雰囲気を感じていた。そんな当麻を尻目に打ち止めは夢の中へと入って行く。

「それにしてもフレメアは爆睡ですね」

「本当だ・・・って、腹出して寝ると体調悪くするってのに」

フレメアが黄色地のパジャマの腹部を肌蹴させている。

「んにゃ・・・ああ・・・」

「つたく・・・」

それを見た当麻は、優しい笑顔でその肌蹴たパジャマを直す。

そんなホンワカとした光景を、ハンカチを食い干切らんと噛んでいる人が。

「なんでこんなにも私の居場所は無いの・・・？」

一人愚痴をこぼす看護婦だった。

「うおーっ、顔を洗って目がぱっちりいって、ミサカはミサカは腕を伸ばして朝の美味しい空気を吸ってみる！」

ぐいーっ病室に届かんばかりに腕を伸ばす打ち止め。

青地に白玉模様のパジャマから、いつもの服装”上条Yシャツ”に袖を通す。

「お腹が少し痛い・・・にゃあ」

時折ぐうーと鳴るお腹を擦っているフレミア。

多分その音は半分空腹からなのだろうが。

「だからあれほど腹に掛けてやったというのに・・・」

「お兄ちゃんの好意を全て蹴ってましたからね」

「ごめんなさい・・・」

「んゝまあ分かってくれれば、な」

「そうそう、お兄ちゃんは言っただって分かりませんし」

「わあ・・・全然説得力が無かった・・・にゃあ」

「うーん、そんな貴方がいいんだけどって、ミサカはミサカはフオローしてみる」

そんな話をしていると、もう恒例の看護婦登場。

「はい朝ごはんですよー」

「なんでそんな棒読みなんですか」

「今お兄ちゃんがそれ言います？」

「うわあ・・・女心分かって無い・・・にゃあ」

「うーん・・・流石にこれはフオローできない」

こうして、これからしばらく食べないであろう病院食を堪能する。

”あろう”と言ってしまうあたり、また入院しに来ると言っているようなもののだが、実際にそうなのでこの言い方で合っているの
だろう。

昼からは退院の準備、夕方から彩月花祭だ。

A c t ・ 4 6 (後書き)

やっと彩月花祭の話が出来る・・・長かった・・・(笑)

そう言えば、少し見ない間にアクセス25万、ユニーク3万、総合評価500。

ここまで行った事が不思議ですw

読んでくださる読者の皆さま、ありがとうございますm()m

次話の更新は未定です。出来上がり次第更新しようと思います。

「とつても静か。にゃあ」

鳥のさえずりが聞こえる、欠伸が出るほど穏やかな病室。朝食も終わり、退院の支度をしているこの時間。隣ではベットで二人抱き合って寝ている最愛と打ち止め、そして荷物をまとめるのを手伝ってくれるフレメア。

「いやスマナイね、本当は一人でやるべきなんだろうけど」

「ううん、大丈夫。いつもお姉ちゃんのお仕事のお手伝いしてるから」

自分の横ですやすやと寝ている二人を見て微笑むフレメア。

「こうしてフレメアが手伝ってくれてるって言うのに二人は・・・」

「昨日の夜は楽しかったからね。疲れちゃったんだよ」

えへへ、と照れながらその光景を思い出すフレメア。

夜、それはそれは大騒ぎ。

病室の電気が消されてからというものの、いわゆる修学旅行のテンションになった女の子三人は好きな人がどうの、気になる人がどうのとその話題の中心人物を横に話し始める。

その話は加熱していき、誰が一番当麻を好きか、誰が一番当麻を知っているかという話題で盛り上がる。

もちろんその話全般を当麻は聞いている訳もなく、さっさと寝てしまっていたので微塵も耳に入っていなかったのだが。

「そういうフレメアは？」

「いつも麦野のお姉ちゃんに『綺麗になりたかったらちゃんと寝なさい』って言われてるから、実は夜遅くまでは起きてないんだ。にゃあ」

「おお、その美容法を是非、ウチの最愛とフレメアにも教えてやってくれ」

「教えなくても十分綺麗だよ？」

「そう言うんじゃないくて、夜遅くまで起きる事自体が肌に良くないだろ」

自分のもちっとした肌を触り、

「まあ、確かに。にゃあ」

「だろ？」

「さて・・・これでいいかな」

あらかたの持ち物をキャリアケースに詰め終わり、一息つく当麻とフレメア。

「お疲れ様、にゃあ」

「フレメアもありがとうな。喉乾いたら、ちょっと飲み物買って

くる」

「ありがとう」

「手伝ってくれたお礼だ」

そう言っつて病室を後にする。

「と、言っつたはいいものの・・・」

自販機の前でもうかれこれ5分悩んでいる。

フレミア程の歳の女の子の好む飲み物が分からない。
と、

「どうしたカミヤん、病室居なくていいのか？」

アロハシャツ・金髪・サングラスという、どう見ても関わりたくない方の恰好をしている男が話しかけてくる。

「ん？ ああ土御門か。いやね、人の好みってわかんねーなって悩んでたんだよ」

「はあ、自販機の前でか？」

「うん、その子が何好きなのか分かんないんだよ」

ぴくつと土御門の眉が動く。

「今、”その子”って言ったか・・・？」

「ああ、まだ小学生の女の子なんだけど、サイダー飲めるかな」

とか……ってあれ、何で俯いてんだ？」

「ふ……ふふふふ」

「おいどうした？」

「またカミヤんはそういう感じで女の子とイチャイチャ！！ 義妹はどうした！ 最愛ちゃんは！！ あの天使のような笑みを浮かべる最愛ちゃんをカミヤん、お前は泣かせるのかあ……！」

「なんでそんな一人暴走してんのか分かんねえけど、とりあえずここは病院だ。大人しくしろ」

「義妹同盟は何処に行った！ 同胞の誓いはっ……義妹への愛情は何処に行った……！」

「土御門、最愛が俺の義妹になってからなんかリミッター外れるの多いよな」

「義妹こそ宝、世界遺産！！ それはあの時に誓っただろう！」

あの時、それは最愛が当麻の部屋に住む事になってお隣の土御門宅へ挨拶をしに行った時。

それはもう土御門元春は『ようこそ我が同志！！ 義妹の世界へ！』と熱烈歓迎、舞夏は舞夏で『上条当麻に捨てられないように一からみっちり花嫁修業の特訓してやるぞ！』と訳の分からない気を回す。そういえばあの流れで誓いみたいな事を口にしてしまった気がしなくも無いが……。

「っていつかなんで土御門がここに居るんだ？」

「さり気なく話を逸らすか……まあいい、この話は後でみっちりしてやる。あー、ここに居る理由？ それはもちろん……」

言おうとする土御門を一旦制止し、

「お前がそもそも俺の見舞いに来るなんて優しい考えはもう捨ててるからな」

とだけ告げておく。まあ、土御門はなんだかんだで友達思いな奴だ
という事を当麻はちゃんと知っているのだが。

「また女の子が毒牙にかかっているとと思ってたらカミヤんを殴りた
くなつてな」

「またそれ？ 俺は別に女の子に毒牙になんか掛けて無いっての」
「それはカミヤんの病室に行けば分かる事ですたい。ほら、飲み
物買うなりしてさっさと行こう」

「うーん、その買うモノをどうしようか迷ってるんだが？」
「じゃあこれで良いか？」

取り出したのは一つの大きい水筒。

「これは？」

「うちの舞夏の特性ジュースですたい」

「おお、以前作ってくれた果汁100%の！」

「それに今回はアレンジを加えてさらに美味しくなってる。まあ
飲めば分かるな」

「そりゃ楽しみだ。んじゃあそれ持っていけばいいか」

そうして二人は自販機から病室へと歩みを進める。

Act・47(後書き)

今さっき書いたばかりなので、後日修正加えるかもです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2742x/>

上条with絹旗

2011年12月4日00時51分発行